23

エスペル諸病新療法

一名（治療之真理）

文學博士　福來友吉君序文
日本エスペル病院長　赤鹽精君著

爵　大隈重信君序文
伯爵　東久世通禧君題字
文學博士　井上圓了君序文

東京　大學館發兌

60-231

伯爵大隈重信君序文
伯爵東久世通禧君題字
文學博士井上圓了君序文

文學博士 福來友吉君序文
日本エスペル病院長 赤鹽精君著

エスペル諸病新療法

東京 大學館發兌

大日本帝國臣赤鹽精謹デ本書ヲ世界各國ノ
皇帝陛下
大統領閣下
ニ奉獻ス熟々惟ルニ現時ノ療法ハ醫祖ヒポクラテス以來二千餘年ノ星霜ヲ經過シタリト雖トモ尚且原理原則ノ發見ナク徒ラニ試驗的ノ手段ノミヲ施シ居ルニ過ギズ故ニ確タル治驗ノ見ルベキモノナク空シク病床ニ呻吟シ天壽ヲ全フセザル者幾千萬人ナルヲ知ラズ豈世界人類ノ最大不幸ニ非ズヤ　臣精之ヲ憂ヒ多年寢食ヲ忘レテ根本的學理ヲ研究シ治療上ノ大原則ヲ發見スルコトヲ得タリ此原則ニ據レバ腦、神經系病ヨリ內臟諸病特ニ全世界ニ於テ最モ憂慮スル所ノ肺癆ニ至ルマデ其病理治法共明確トナリ

實際ニ於テモ亦佳効ヲ奏シ得ルニ至レリ依テ茲ニ其學理ヲ記シ一小册子トシテ奉献シ聊カ博愛ノ誠意ヲ以テ貴國臣民ノ病苦ヲ救濟スルノ資ニ供シ奉ル仰ギ願クハ世界各國ノ

皇帝陛下

大統領閣下

幸ニ微意ノ存スル所ヲ察シ有司ニ命ジテ速ニ此學理ヲ應用セシメ社會ニ永久ノ幸福ヲ附與セラレンコトヲ終リニ臨ミ特ニ世界各國ノ

皇帝陛下

大統領閣下

ニ滿腔ノ敬意ヲ表シ奉ル恐惶恐懼謹デ奏ス

al

Lia Imperiestra Moŝto

Lia Reĝa Moŝto

kaj

Lia Prezidanta Moŝto

de ĉiu nacio kun granda honoro, tiun ĉi libreton prezentas tuthumila servanto Sei Akaŝio japano.

Kvankam post la unua kuracisto Hipocrates', pasis dumil jaroj ĝis oni atingis la nuntempan kuracimetodon, sed ĝia fundamenta principo ankoraŭ ne estas eltrovita kaj oni provas nur eksperimente; sekve ne estas certa rezultato kaj ĉiujare milionoj da homoj vane suferas aŭ mortas kun nenaturaj jaroj. Ĉu tio ne estas vera malfeliĉego de la tuta homaro ?

Mi de longe tion bedaŭradis; kaj post longa studado pri la fundamenta teorio, mi fine eltrovis ĝian plej gravan principon. Per tio, la malsanoj de la cerbo, la nervasistemo kaj ankaŭ de ĉiuj internaj organoj, kaj eĉ la ftizio, pri kiu la tutmondo tiel priĉelaŭregas, ekklariĝas je ilia kaŭzo kaj ankaŭ en realeco ili facile resaniĝas.

Kun profunda sincereco, mi do prezentas tiun ĉi libreton enhavantan la de mi eltrovitan teorion. Se ĝi servus ĉe iemete por savi aŭ por malgravigi la suferon de la regatoj de

Lia Imperiestra Moŝto,
Lia Reĝa Moŝto
kaj
Lia Prezidanta Moŝto,

mi estus treege felica.

Bonvole kredu la sincerecon de la humilega servanto, kaj studigante tiun ĉi teorion al emine taj scienculoj por ke la societo povu dankemege ĝui eterne la feliĉecon!

Fine al Lia Imperiestra Moŝto,
Lia Reĝa Moŝto
kaj
Lia Prezidanta Moŝto,

la plej altan respekton prezentas

lia tutihumila servanto

S. Akaŝio.

序

赤鹽精氏は多年治療の原理を研究して發明する所あり玆に其學理を記し各國の主權者に獻じ廣く世の病苦を救濟せんとて來て余に序を求む余之を閲するに頗る嶄新獨得の意見にして特に細菌に就ても前人未發の新說を述べたるものゝ如し然るに余は治療のことを審かにせざれば敢て詳細の論評を下さずと雖ども本書の新學說が社會の承認する所となり治療上に新紀元を啓くに至らば世界人類の幸福を增進する所以なるを思ひ一言を述べて以て序文となす

伯爵　大隈重信

序

赤鹽精氏遠く名古屋より來りて一日余が茅廬を訪ひ語りて曰く多年治療の原理を講究し之を實驗に照し哲學に考へ聊か發見する所ありたれば其大要を編成して廣く之を天下に示さんとすと而して其所論を聞くに近來醫學の進歩は益々物質の方面に偏傾し精神の方面を輕視し爲に病理を誤ること多しとの意を執らるゝものゝ如し余曾て心理療法の一書を著し治療法に生理的心理的の兩方面あることを說き醫家の治療法は生理の一面に過ぎず是れ未だ其完きを得たる

ものにあらずと論ぜしことあり此點に於ては赤鹽氏と稍其意見を一にするが如し而して氏は醫家の學説までも一新せんとするの勢なるも余は醫學其物を審かにせざれば其可否を論ずるの限りにあらず唯余が説と合したる一點を擧げて此に本書發刊の擧を賛するの意を述ぶ

哲學堂主

和田山

文學博士　井上圓了

序

精神力ガ疾病ノ治癒發作ノ要因トシテ偉大ナル勢力アルコトハ、吾人ノ既ニ主張スル所ナルノミナラズ、種々ノ新事實ニ遭遇スルニ從ヒ、其勢力ノ範圍愈廣大トナリ、吾人ヲシテ其底止スル所ノ那邊ニアルヤヲ知ラザラシム、然ルニ世人茲ニ見ル所ナク、徒ニ舊習ニ盲從シ、藥劑ノ力ヲ過信シ、之ヲ除テ疾病ヲ治スルノ道ナキモノト思ヘリ、惑ヘリト謂ベシ、友人赤鹽精君茲ニ感ズル所アリ、孜々トシテ日夜新治療法ノ研究ニ從事セラルヽモノ茲ニ年アリ、此頃其業績ヲ集メテ一書トナシ、

名ケテ「エスペル諸病新療法」ト稱シ、來リテ余ニ序ヲ請ハル、余之ヲ閲スルニ立論清新發明ノ跡大ニ見ルベク、從來坊間ニ流布セル此種ノ書ト其撰ヲ異ニスルモノアリ、蓋シ世ノ惑ヲ解クニ於テ多大ノ貢献アルヲ信ズ、余既ニ斯學ニ對スル君ガ熱心ヲ愛スルモノ、今又此好著ニ接シ、其業績ノ世ニ知ラレンコトヲ希フヤ切ナリ、乃チ所感ヲ述ベテ以テ序トナス、

文學博士　福來友吉

自序

現今疾病治療の方法は其種類極めて多しと雖も皆試驗的にして一も根本的に解釋せられたるものなし故に病者は唯徒らに種々の方法を試み然も終に概ね得る所なくして不幸の淵に呻吟しつゝあるは豈歎すべき事にあらずや是れ主として治療上の原則が未だ世界に於て發見せられざるに由らずんばあらず予之を憂ひ多年寢食を忘れて根本的學理を研究し茲に此小冊子を著して其原則を示し世人をして歸する所を知らしめ廣く世の病苦を救濟せんと欲す世人幸に此書を熟讀せば治療上に關する眞理の光明を認むる事を得て健康に裨益する所多大なるべしと信ず抑々疾病は生命に關する重大の事柄なれば何人も其大要の學理を心得置くの必要あるものとす故に本書に於ては專門家にも將又何人にも了解し得らるゝ如く極めて平易に説明する事

を勉めたり但し尚深く病理を論述するには所謂第二人格の作用まで
も説明するの要ありと雖も斯る作用は現今の社會には尚不思議的に
考へられ却て疑惑を生するの憂あるべきを慮り暫く之を省略する事
となせり要するに予は現社會の智識に鑑み只管世人を病苦の淵より
救ひ出さん事を主眼となし肺病其他の難治症に就ても一貫の學理を
以て解釋し茲に治療上の大原則を示したるものなれば全世界の人々
に向て永久的に貢献する所決して少なからざるべしと信ず

明治四十一年二月

著者識す

目次

第一章　治療上の原則……一
著者の目的……一
人類には特別の療法を要す……一
從來の療法は確たる効なし……二
内科治療は進歩せず……五
醫祖ヒポクラテスの説……三
アクスピオス神……四
神佛の効驗……四
ヒポクラテスの誤り……五
科學的研究の缺點……五

目次

滿州土人に賣藥の効ある理……六
田ウコギ草の効……七
藥は病を治すものに非ず……七
服藥治療は將來に多くの望なし……八
注射療法……八
電氣療法……八
賣藥……一〇
脊髓神經……一二
腦神經……一四
視神經、聽神經等の作用……一五
戰爭中彈丸の當りたるを知らざる事あり……一五
內臟機關の作用……一六

目次

迷走神經、交感神經……一七
腦髓は全身体を主宰す……一八
消化作用……一八
血液循環……一九
傷なくして皮膚より出血す……一九
波動体温の變化……二一
体温は腦髓の力より起る……二二
言語にて生命を絶つ……二三
呼吸作用……二三
分泌作用……二三
ピッケル氏の報告……二四
乳汁の分泌……二四

排泄作用……二四
大小便の排泄……二五
疣の治療……二六
火傷を作る……二六
火渡の術……二七
灸にて腫物を治す……二八
大鳥博士の胃癌……二九
瘭及び濕疹の治驗……三〇
筋肉の腐蝕……三一
腦髓は心理生理の作用を起す……三二
腦作用の分類……三三
人体は電氣機關の如し……三五

腦髓は總の刺激に反應す……三七
刺戟に對する腦の反抗……四〇
意思の强き者は病に犯さるゝ事少し……四二
疾病は有害的刺戟より發す……四三
病氣の治る原理……四五
催眠術……四六
安產が出來る……四九
治療上の大原則……五一
萬世不易の眞理……五二
從來の內科醫術は淺薄なり……五三
醫術上の最大誤謬……五三
ベルンハイム氏の說……五四

治療上の大變革……五五
青山博士の意見に答ふ(大隈伯爵邸に於て)……五五

第二章　內科新病理……五九

神經衰弱……五九
藥は却て腦を惡くす　藥の中毒　藥劑は効なし　本病の原因　治癒すべき理由　耳鳴の療法　陰萎、遺精　中西博士の意見

神經痛、僂麻質斯……六三
藥は効なし　本病の起因　僂麻質斯は傳染病に非す　切斷したる手足の神經痛　舟が動搖して神經痛が治る　体溫器で神經痛が治る　瀉車の衝突に由り僂麻質斯が治る　敵將の降伏に由り僂麻質斯が治る　蜂に螫されて僂麻質斯が治る　本病に外科手術は誤り

喘息……六六

吐根末を與ふるは適法に非す　病根は腦に在り　腦より治療するを要す
從來の療法には主義方針なし

歇私的里……七一
本病の原因　腦の衰退より發す　神經藥は惡く無効　電氣療法は屢々有害なり　金屬に由り知覺脫失の部位を變ず　金屬を內服せしむるは誤なり　陰核及び卵巢の外科手術　外科手術は誤なり

癲癇……七四
本病の原因　神經藥は無効　穿顱術の誤り　椎骨動脈の結紮　外科手術より本病を引起す　卵巢の手術　機能的疾病の手術は誤なり

胃腸病……七七
胃病に用ゆる藥劑　藥は本病を治すものに非す　胃病の治る理由　胃痛　莫兒比涅の中毒　食物上の注意　便秘　下痢　三年間の不食病、飲食せ

ざるも生活する事あり　盲腸炎（有栖川若宮殿下の薨去に就て）……八五
脚氣……八五
米中有毒說　同說の誤り　ユーオエルマーン博士の報告　予の意見　八木長恭氏の試驗　本病に用ゆる藥劑　腦と本病との關係
心臟病……九〇
藥劑及び中毒　藥劑は効なし　脈搏の變化　治るべき理由　治驗
糖尿病……九三
藥劑は効なし　食餌攝生法　糖分比例　醫術上の矛盾　肉食か本病を治癒するの理由なし　本病の原因　腦髓中の變化　精神との關係　予の治驗
腹水病……九七
藥劑は本病を治癒する所以に非ず　本病の發生　予の治驗二十年來の腹水病
腎臟炎……一〇〇
藥劑及び其中毒　本病の發因　大澤博士の意見　予の治驗
瘰癧……一〇三
藥劑の効なし　先天的原因　後天的原因　腦の衰退錯誤より發す　昔し愛爾蘭土にて治療す　予の治驗
虎列刺病……一〇六
殺菌其他の方法も確効なし　虎列刺菌を飲む　健康体にも虎列刺菌あり患者に接するも傳染せず　腦と本病との關係　伊太利の實例　本病の治すべき理由　殺菌の目的は不可なり　醫術上の研究は淺薄
完全治療……一一二

生理的治療、心理的治療　唯物論　唯心論　絶對の眞理　完全治療法の定義、圖解　予の療法　予の療法は有効無害なり　予の療法は未だ完全に非ず　エスペラント　エスペル療法　現今の研究は餘りに專門的なり　ベルツ博士の説　科學萬能主義　內科醫術は退歩の傾あり　古哲の卓見　釋迦、弘法、日蓮　プラトーン　ソークラテース　治療上の迷信　今日の醫術も半は迷信なり　今日の醫術は尙試驗中なり　治療上の妖雲を排除す　緊要の注意

第三章　肺結核新病理……二五

藥劑及び其中毒……二六

諸病院の處方……二七

ライデン博士の意見……二〇

ヒルシュ氏の説……二三

醫書に記する本病の豫後……二三

醫書に記する治療法……二四

空氣及び食飼療法は治療法と稱するの價値なし……二五

プレーメル氏デットワイレル氏……二六

獨逸療養所の處置……二六

過たるは猶及ばざるが如し……二七

コッポ氏の發見及び學説……二九

濁水を飲で害を受けず……二〇

コッポ氏の發見は却て肺病を多くす……二〇

微菌恐怖病……二〇

傳染の學説、解剖上の結果……二〇

目次

ベーリング氏の說……一四九
コッホ氏の說……一五〇
從來の療法では治らず……一五二
予の發見黴菌新生說……一五四
肺病は如何して起る乎……一五九
殺菌劑を與ふるは誤なり……一六六
本病の治癒すべき理由……一六八
事實に就て予の學理を證明す……一七一
肺病全快實歷表……一七四
全表の說明……一七七
某婦人の全治談……一八三
予の療法と患者の心得……一八七

予の治療したる治驗の數例……一九一
ツベルクリンに關する予の意見……一九六
警告……一九九

目次終

エスペル諸病新療法

日本エスペル病院　赤鹽精著

第一章　治療上の原則

予は多年内科的疾病の治療に從事し種々研究の結果從來の療法には根本的の誤りがあつて夫がため治驗の擧らざる事及び治療上の最大原則を發見したりと自から信じて居るのである依て茲に其學理を述べ聊か人類社會の病苦を救濟し併せて治療法の改良を謀りたいと思ふのである

是迄の治療法は犬猫の如き下等動物も人類も同一の方法を用ひて治療し來つたのであるが人類は腦力が發達して道理を解し得るものなれば特別の方法を用ひて治療すべきもので斯くすれば容易く病氣が治癒せらるべきものである然るに從來の療法

は斯る點まで研究が進で居らず概ね皆姑息的に流れて其大本を誤つて居つたが爲に世人が出來得る丈の勞力と金錢とを費して疾病の治療に從事して居るが一向夫程の効驗がなく病の爲に苦んで居る者が世間に甚だ澤山ある否のみならず夭壽を全ふする事能わずして父母兄弟妻子に永別する人も少なくないのである是は主として治療上の眞理が未だ世界に於て發見せられざるに由るものにして予は此事に就て自得したる所あれば社會人類の爲め之を發表するは敢て無益の業に非ざるべしと信ずるのである

例へば從來の醫術に於ては肺病を治療するに結麗阿曹篤(クレオソート)及びグァヤコールの服藥若くはツベルクリンの注射をして居るが既に効能がないといふ輿論になつて居るので現今では空氣療法と食飼療法即ち善良なる空氣の所に居て滋養分に富みたる食物を執て居るといふに過ぎない喧しい肺病に對しても斯の如き譯で實に便のない事である其他腦病、神經衰弱、神經痛、僂麻質斯、ヒステリー、喘息、癲癇等より胃病、心臟病、脚氣、黄疸、肋膜炎、腎臟炎、糖尿病、腹水病、虎列刺病等の如き内科諸病に於て如何なる病理に由り如何なる處方を用ひて治す事が出來るかといふに一つも確實の療法がない夫故是等の病氣に罹つた人は皆難儀して居るのである

醫術の内でも外科に屬するものは比較的進歩して居るが内科即ち重に藥を飲む所の療法は昔から左程進んで居ない故に實際に於ても効果の擧らない事は世人の目際して居る通である現今の社會に於ては病氣と言へば直に藥といふ事を思ひ起し藥を飲む事が病氣に對する一の儀式の樣になつて居る這は昔から習慣の然らしむる所であるが實際藥といふものは病氣を治すものでない唯一時病勢を抑へて居つて自然に治つて來るのを待て居るのである醫術の元祖ヒポクラテスも病氣には自然の經過といふものがあつて醫術は唯之を補助するに過ぎないと申して居る例へば大風の吹く時に家屋へツッカイ棒をして風の止むのを待て居る樣な譯である故に輕い病氣は治る事もあるが否藥を飲まずとも治る病氣はあるが少し念の入た病氣は何程藥を飲で

も治らないのである

元來ヒポクラテスといふ人が如何なる動機に由て醫術なるものを始めたかといふに昔し希臘に於てはアクスピオスといふ神様に病氣平癒の御願をかけたもので患者は斯くして神殿に寐て居ると何かの夢を見る例へば腹の痛む人が右の如くして櫻の木の夢を見たとすれば櫻の葉とか皮とかを煎じて飲むといふ様な事をして病氣を治療し効驗のあつた時には其事柄を委しく額面に書て神殿へ奉納する習慣になつて居つたのである我國で言へば神社佛閣へ繪馬を上るのと同じ事である斯様な譯からしてアクスピオス神の神殿には澤山に額面が上つて居る其所でヒポクラテスは是等の額に書てある所の記事を取調べ例へば櫻の葉で腹痛の治つたといふ額面が澤山あつたとすれば櫻の葉は腹痛の藥であらうといふ様な考へからして醫術の本を開いたのである

總て神佛に祈願して病氣の治るのは心理の作用即ち神様の御力に依て自分の病氣は治ると信ずる所の心の力で腦髓の作用が變つて健康時の働をする様になるからであるがヒポクラテスは斯る作用の事には氣が付かなかつたらしく重に木の葉の如き物質に注目して研究した様である尤も希臘のソクラテスやプラトーンの如き有名な哲學者は心理の事を稱へて居つたのであるが何人も兎角に物質即ち目に見へる所の事柄には注意が向き易く心といふ無形な事は等閑に附するもので今日の社會に於ても尚其通である斯の如き次第でヒポクラテスの後繼者は重に物質即ち生理的の方面にのみ着目して研究し來つたので醫術は元と心理から產れたものであるが其根本を忘れて生理一方の研究となり終つたのである

而して其研究の方法としては所謂實驗的科學といふて例へばAといふ藥をPといふ病氣に用ひたら幾人治つた事がある分り易く言へば田ウコギ草を煎して飲だら肺病患者が幾人治つた事がある故に田ウコギ草は肺病の特効藥であるといふ樣に統計的に歸納して終に今日の醫術といふものが形造られたのである然し斯る研究は唯物

質的方面の觀察のみで其藥を飲だ時の患者の心は如何なる狀態でありしかを不問に附して居たのである即ち表のみを見て裏面を見ないのである適切に言へば藥其物の効であるか或は患者の心的作用から効能が顯われたのであるかを深く究めなかつたのである

現今滿州の土人に對しては賣藥の健胃散が多くの病氣に効能があるといふ事である斯る場合に於て唯統計的に研究して健胃散は萬病藥であると論定したならば大なる間違を生ずるのである現に內地人に對しては胃病にさへ大した効はない然らば滿州の土人には何故健胃散が萬病に有効なりやといふに滿州は未開の地で是まで醫者や藥といふものがなかつた然るに此度日本から非常な名藥が來てドンナ病氣でも治るといふ評判が高くなつて居る斯る評判の爲に患者が其藥を飲む時には此藥で飽度病氣が治るといふ心的作用を起し非常の効を奏する事になるのである故に滿州に於ける健胃散の効能は重に心的作用に屬するものである斯る譯であるから滿州の土人には精錡水を頭に塗り附ても頭痛が治る樣な事があるだらうと考へる

數年前東京地方では田ウコギ草で肺病が治るといふ評判が高かつたので其當時には隨分治つた人もあつて多くの新聞にも名前が載せてあつた其後何でもない草であるといふ事が知れて今日では田ウコギ草の事を口にする人さへなくなつた滿州へも今後益々賣藥が輸出せられて難有味が減ずると同時に其効能も亦減じて行くのである內地では醫者や藥も澤山あり且一般社會の物質的知識が進で居るゆへ醫士の診察を受ける時に患者が其處方を覺へ今日では素人でも色々な處方を知て居る人が隨分ある腦病には臭剝（シウボク）、寒胃には揚曹（ヨウソウ）、胃病には苦味丁幾（クミチンキ）、肺病には結麗阿曹爲（タレスアトバイ）を用ゆる位の事は大概の人が知つて居る樣になつて藥を貴重視する所の心がなくなつて來たので賣藥は勿論醫士の投藥さへも一向効がない樣になつたのである

詰る所大体の上より論じて藥其物には病を治す所の効はなく藥を貴重視する所の心的作用が重に病氣を治すのである既に獨逸抔に於ても服藥の効能に就て疑を抱く

人が往々出來て來たのである文明國に於ては現今でさへ左程の効がないのであれば今後社會の知識が進歩するに從て服藥は愈々効力を失ふ樣になつて來る事は明かである故に服藥治療は到底將來に多くの望を屬すべきものでないと予は論して居るのである而して今日の內科醫術より服藥を除く時は殆ど次の如き方程式が成立するのである

內科醫術＝服藥

故に

內科醫術－服藥＝○

又近來注射療法が流行して秘密とか新發見とか稱へて居るのがある當局者が之を取調べた所が何れも從來ありふれたる普通の藥品を自家新發見の如く粧い患者を招き寄せんとの策であつたといふ事が明治卅九年八月の醫海時報に揭げてある概して注射療法が初の內は幾分効のある樣に見へるのは重に心理作用に基て居るのである

神經系病に電氣を應用する事は現今でも行はれて居り又民間に於ても電氣帶杯を販賣して居るが何故電氣が病に効があるかといふの學理はなく唯稀に治る事があるから用ひて居るといふに過ぎぬ元來電氣は神經に一時的の刺戟を與へる丈で電氣其物に病を治す所の効はないのである英國のドクトル、タッキー氏も既に此說を稱へて居る偶々電氣に由て治つたのは心理の作用に基て居るのである故に電信、電話、電燈、電車等は皆電氣の作用で身体に接すれば溺死を起すものであるといふ事を承知して居る者には概ね其効なく唯無智無學にして電氣を如何にも不思議に思ふ樣な人に對して稀に効を奏する事があるのであるタッキー氏の著書には体温器を口中へ含ませて置たら顏面神經痛が治つたといふ例がある故に電氣療法は未開の人民に向て用ゆれば多少の効はある其他外國には虎列刺帶といふのもあるといふ事である恰も智識の低い人に對して御札や御守の効を奏する事があるのと同じ譯である

近頃佛國の或醫師は電氣を以て人を睡眠せしむる事を工夫し之に依て不眠症を治そうとして居るとの事であるが歸する所麻醉劑を用ゆるも同じ道理で藥劑の代りに

電氣を以て一時腦を麻痺させる丈で不眠其物を治す事は出來ない譯のものである

近來は賣藥が益々盛になつて新聞紙上にも日々澤山の廣告がある抑々賣藥は政府に於て其配劑を取調べ人体に害がないと認むれば之を許可するので其効能の如何は敢て問わないのである故に蕎麥粉や小豆の粉を丸め或は田ウコギ草の粉末を脚氣若くは肺病の藥として賣りたいと出願すれば政府は之を許可して呉れるのである世間には所々の醫者に掛つても更に効が見へず腦病、血の道、胃病、肺病等で苦んで居る人が甚だ澤山にある故に病人の困つて居るのを附込んで賣藥の廣告に全快者の禮狀山の如しとか何々博士の證明藥とかいふ樣に巧に効能が書き立ててあると病人は病が苦しさにツイ買て見る樣になる而て廣告の方法も益々巧妙となり何病には不思議な妙藥がある人助の爲に敎へて上るとか或は醫士と仲間で表向きは醫士の名義で何所の藥は卓効があるから患者は用ひて見よといふ風に廣告したり或は金時計や債券を與へるといふ樣に懸賞廣告をしたり其他色々な方法を以て病者を欺き唯金儲けを目的として居る奸商が甚だ澤山ある此の樣に益々奸商が跋扈するは何の故かといふに今日の內科醫術が一向効がないからである唯さへ病の爲に難儀して居る者を尙其上に欺いて金を取り苦痛を增させるとは實に怪しからぬ譯である然し法律を以て之を取締るといふ事は到底出來ない事で患者は實に氣の毒なものである必竟するに未だ治療上の眞理を世人が知らないからである古語にも汝に出づるものは汝に復へるといふ事がある通り斯る奸商輩も自身が病氣になつた時には矢張り他より欺かれる事になるのである故に予は治療上の眞理を示して世人を救わふと思ふのである

右に述べたるが如く從來の方法は其基礎が甚だ不確實であり隨て其効能も乏しいものであるから之に代るべき有効確實の療法を設けねばならぬ夫に就て予は根本的に研究して最初に治療上の原則を定め之を各疾病に應用する所の方法を工夫したのである此原則を說明せんには少しく人体の組織に就て述べねばならぬ

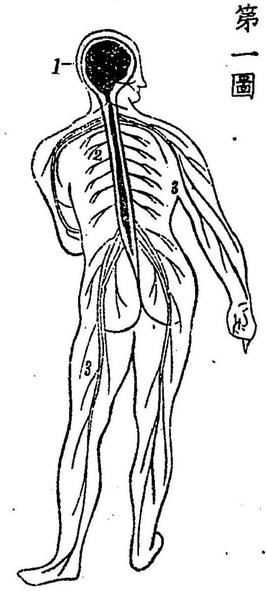
生理學や解剖學の一端を學んだ者は能く知つて居る通り神經組織の根本は第一圖

にも示す如く腦髓であつて、是より數多の神經纖維が派出して各部を適當に活動させる樣になつて居るのである即ち手を動かす所の神經纖維は肩の部に於て脊髓より分れ又足を動かす所の纖維は腰の部に於て脊髓より分れて各指先にまで達して居り而して

1. 頸部　2. 胸部　3. 腰部

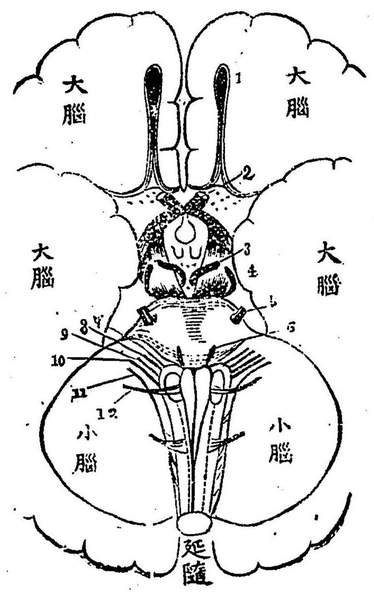
脊髓は根本の腦髓に連絡して居るのである斯く脊髓を經て後分派するものを脊髓神經と名を附けて居る

第一圖



下級の中樞が獨立的の働をする事は冷血動物例へば蛙に於ては温血動物よりも多く又温血動物の中でも鳥類若くは兎の下級中樞は猿猴類よりも多大の働をするものである斯く動物が高等となるに從つて腦髓の力は益々強大になつて來るもので人類

第二圖



に在ては腦髓が充分に其力を逞ふし脊髓は單に腦髓と末梢部とを連絡するの役目をするに過ぎない程になつて居るのである

直接に腦より分派するものを腦神經と稱し其數は十二對ある第二圖は腦髓の下面で各神經の起始部を示したものである圖上の(1)は鼻神經の起始部で夫より鼻腔内に達して嗅覺を司どり、(2)は視神經の起始部で夫より眼球内に達して視覺を司どり、(3)(4)(6)の神經は眼窠内の諸筋に分布して眼球の運動を司どり、(5)三叉神經は分れて三枝となり第一枝は顏面の上部、眼球及び鼻に分布し、第二枝は顏面の中部及び上顎の齒牙に分布し、第三枝は舌の粘膜に分布して味覺を司どり且つ咀嚼筋及び下顎の齒牙に分布す、(7)顏面神經は顏面の諸筋に分布して其運動を司どり、(8)聽神經は耳の内部に分布して聽覺を司どり、(9)咽頭神經は舌及び咽頭に分布し、(10)迷走神經は重に喉頭、肺臟、心臟及び胃腑に分布し、(11)(12)の神經は頭部及び舌の諸筋に分布し斯く腦髓より諸方へ神經纖維が派出して各部を適當に活動させて居るのである但し延髓より下の方が脊髓となるのである

今其作用の一端を説明すれば視神經は腦髓より出て兩眼に達して居り眼底に在る網膜に寫りたる影を腦に傳へ茲に初めて物体の形や色を知る事が出來るのである、耳には聽神經が達して居り鼓膜に響た音を腦に傳へ茲に初めて音を聽く事が出來るのである中年になつてから盲や聾になつた者が人の姿や話し聲を夢に見る事が屢々ある故に眼丈で物を見たり、耳丈で音を聞くものの樣に思ふて居るが實際は腦が見たり聞たりして居るので眼や耳は唯器械的に働いて居るのである其他鼻で臭を嗅ぎ口で食物を味ふのも嗅神經や味神經に由て腦が其事を感ずるから分るのである

戰爭の眞最中に鐵砲の彈丸が足に當つても戰の方に心が奪われて居る時には腦が此事を知らすに居つて、更に痛を感じない事がある昔の書物にも心こゝに在ざれば見れども見へず聞けども聞へず食へども其味を知らずといふ事がある即ち各神經から腦へ報告しても受付役が他の事務に從事して居る時には之を取次がないのである尤

も近來は心理學が進歩して心には現在的と潜在的とあり現在的の心は知らない事でも潜在的の心は知つて居るといふ事實が確められて居るが簡易を主とする爲め其說明は省く事にする

又口中若くは咽喉の諸筋を適當に活動せしめて隨意の發音をなす所の作用から身体幷に手足が活動する事の出來るのも腦髓の力が局部の神經纖維に達して之を働かせるからである

次に內臟機關の作用

即ち肺が呼吸の働きをなし心臟が血液を循環し胃が食物を消化する樣な器械的の運動も腦髓の力が交感神經及び迷走神經といふ纖維を傳つて局部に達し之を働かせるからである兎が極めて物に驚いた時には心臟の鼓動は一時停止し暫時の後劇しく動悸を打つ樣になるが若し迷走神經を切斷して置て驚愕せしむれば敢て鼓動上に變化を起す事なしといふ故に內臟機關の器械的運動をなすは重に交感神經を經由して局部に及ぼしたる腦髓の力であると考へる事が出來るのである

第三圖

交感神經分布ノ略圖

交感神經は不隨意運動及び腺の分泌を司どるものにして第三圖に分布の大要を示すが如く(1)は腦髓、(2)は脊髓、(3)より(4)に至るまで恰も珠數の如く脊髓に並列した數多の神經節より成るものを交感神經といふ此神經は腦髓より出で又各節に於て脊髓と連絡して居る而て此神經より更に枝を生じて內臟機關に分布して居る(5)は心臟に、(6)は胃に、(7)は血管に及ぼして居る所の叢を示したのである此交感神經が他の神經と異りて珠數狀をなす所以は根本たる腦髓より直接或は間接に（脊髓を經て來るものは間接）受くる所の力を大き部分に貯藏して常に一定の力を各部に供給し

器械的の運動をさせる爲である

右は極大要丈を説明したのであるが之に依て腦髓は全身体を支配する樣に組織されてあるといふ事が大略分るだろうと思ふ斯の如く腦髓は全身を主宰する樣になつて居るから腦髓の作用上に變化が起る時には必ず多少とも身体の上に影響を及ぼすものである

極分り易い例を擧て説明すれば何ぞ心配な事が起つた時は急に氣分が悪くなり一向飯も食べたくない假令へ美味なる食物でもウマクない之に反して愉快な心持の時には腹も能く空き漬物で飯を食べても食が進む斯樣に腦髓の作用に由て胃の消化力に變化が起つて來る、腹の立つた時や羞しい觀念の生した時には顏が赤くなり憂に沈んだ時や物に驚いた時には青くなる斯の如く血液の循環上にも變化が起つて來る

月經の滯つて居る婦人が月經中の婦人と同衾し若くは則に於て月經に用ひし栓紙を目擊する時は月經の來る事が往々ある

ドクトル、マビール氏はヒステリー性の若き兵卒に催眠術を施し身体の種々なる局部から出血せしめた事がある又ボウル及びブロー兩氏は男性ヒステリーの患者を催眠せしめ其兩腕に消息子の鈍端を以て姓名を記し出血の暗示を與へたるに左腕は文字通りに細微なる血液を滲出したが右腕は麻痺して居つたので其徵候を現わさなかつたと云ふ事である昔し羅馬カトリック派の信者中には少しの傷もなくして手顎より出血したることありて其當時には之を神の所爲に歸して居つたがこは耶蘇極刑の際に釘を打込たる場所に相當するので宗教的信仰心の高まりし爲め局部に充血して終に出血したのである事が後世に至りて分つて來た

尙又物に驚いた時には動悸が劇しくなり甚しく驚いた時例へば大蛇に出逢ふた樣な時には大熱を發する事があり或は氣絶したり甚しきは死に至る事もある兎を鐵柵內に入て置き柵外で數匹の犬に吠へさせて置けば死ぬものがある斯る事は恐怖した時ばかりではなく極度の喜悅も死を至す事がある米國の或貧窮人が大なる富籤に當

つて其金を貰ひに行き目の前に澤山の金銀貨を差付られたら餘り嬉しかつたので其場で死だのがある山崩れで土中へ埋つた者を堀出して遣つた時に餘り嬉しがつて笑ふ樣な者は大概死ぬといふ事である斯の如く心臟の鼓動、体温、若くは生命にまでも關係を及ぼすものである

一八八七年十二月ヴィエンナ醫會の席上に於てクラフト、エービング氏はイルマ、サンドルといふ婦人の患者を催眠せしめ体温が攝氏の三十五度五分に下るべき事を暗示した施術の初め即ち午後八時には三七、一であつたが午後九時には三六、に下り翌朝午前八時には三五、九となり正午には三五、七となつた而してヒステリー性癲癇の發作するまで同じ温度を有つて居つた此實驗は數回反復せられ体温は暗示に因て低下せしめらるゝのみならず尙又定めたる時刻に於て命じたる通りになる事を證明したソコでベルリン大學の生理學教授プレーヤー氏は之を解釋して皮膚部に於ける劇しき觀念の進行が或る狀態の下に温熱中樞上に作用し得ることを許すの外他に説明すべき方法を見出さずといふて居る

現今の生理學に於ては体温を身体各部に於ける酸化作用に基くと説明して居るが實際に於て飲食を絶ちたる患者が却て熱の上る事がある又蛇蛙の如く然も動物質を食するものでも冷血なのがある故に体温を酸化作用と論ずるは正しき説でないと考へる

予は体温を腦髓の力より發するものと論ずるのである彼の電燈は眞空なる所に於て光と熱とを發するが酸素を含める空氣に觸れしむれば却て消滅するものである而て光熱を發し居る時でも電線の部分は熱くないこは世人が電燈を取扱ふ時實驗して居る事である体温も之と同じく腦髓の力が重に交感神經を經て內臟機關特に心臟部に於て熱を發し之を血液に傳へて全身に温を與へるのである而して病氣の爲め發熱するのは腦髓の作用に變化を來すからであつて蛇蛙の如きは腦の組織が單純で温度を生ずる丈の作用をしないのである

ドクトル、ハックチュークの著書には次の例が擧てある佛國の或る貴族が重罪を犯して死刑を宣告せられた依て實驗の材料に供する事になつて先づ罪人に向て汝の死亡するまで血を取る旨を告げ彼の目を覆ひ腕を刺戟して恰も切つた樣な感覺を與へゴム管より局部へ微温湯を注ぎ血の流れて居る樣な工合にして傍に居る人が彼れの衰弱したること、心臟の鼓動が益々弱くなりしこと及び脈も殆んど絶なんとせしこと等其他之に類する話をして居りしに一滴の血液をも失わずして終に絶命したとの事である

怒る時には呼吸が劇しくなり氣の寒だ時には沈んで來る、ドクトル、グードハート氏の示したる例に或る婦人が某醫士に健康診斷をして貰つた時に醫士は婦人の胸を診察して是は肺が惡くなつて居る此容躰では大分咳が出るべき筈であるが未だ少しも咳嗽がないとは甚だ不審であると言つたすると婦人は此時より俄かに劇しい咳が出る樣になつた事がある之に依てグードハート氏は醫士の患者に對する言語は餘程注意せねばならぬものであると戒めて居る斯く呼吸器の作用に變化が起つて來るものである

哀い時には涙が流れ赤面した時には汗が出る美味なる食物の話をすれば口中へ唾が溜り愛戀の情は精液の分泌を促がす尚外部より直接に見る事は出來ないが食慾の觀念は胃液の分泌を多くするものである近頃露西亞の醫士が多くの人に就て味覺、視覺、嗅覺、聽覺に由て美味なる食物の感覺を起させ置きて其胃液を試驗したるに分泌量の多きのみならず鹽酸及びペプシネを最多く含有して居つたといふ事である

又獨逸ベルリン醫科大學の教授ビッケル氏が明治三十八年十月の内科醫會で報告した事に猫嫌いの犬の胃に孔を明て置て通常の場合に假の食物を與へたら二十分時の後に六十九立方仙知米の胃液を分泌して居つたが猫を見せて怒らせた時には僅に九立方仙知米の胃液ほか分泌しなかつたとの事である是等の例に由るも分泌作用は腦髓に於て支配して居る事が分るのである

カーペンター氏生理學の珍らしき實例中には乳を呑せたいとの强き希望から幼兒に乳房を吸わせたるに未だ子を産みし事もなく且つ未婚の婦人若くは男子からも乳汁の分泌したる者ありしと記してある又初めて産をして二週間を經過し一滴の乳も出ない婦人が米國ドクトル、メーゾン氏の治療を受けに來た同氏は午前十一時に此婦人を催眠せしめ乳汁分泌の機關は完全で唯分泌を促がす刺戟の欠乏して居るばかりなれば午後一時に於て熱き粥一杯を喫すれば乳汁は二時に乳房に集り充分なる乳を小兒に與へる事が出來ると暗示したが果して其通りに能く分泌したといふ之と反對に過度の驚愕憂愁に由て乳の止る事は往々ある事である

船中の一人が嘔吐すれば他の人も嘔吐する樣になり唯嘔吐の談し丈でも嘔氣を催ふす者が往々ある、ベアード及びロックウェルといふ二人のドクトルが米國ニューヨーク病院で試みに一病室内に在りし數多の患者に前日の配劑と異つた無害無効の藥を與へ患者が之を服用した後で兩ドクトルは室内に趣き今服用した藥は藥劑師の過ちで嘔吐劑を與へたのであつたと言ふた所が患者の大部分は嘔吐を始めたといふ事である

道伴れの一人が小便をすれば他の人も便氣を催ふす樣になるものである予の治療した患者で陸軍少佐の細君は婦人會の席へ出るとか或は汽車に乘る時には屢々小便を催ふして堪へ難く厠へ行けば其度毎に通常の尿量を排泄するのであつた

又電話口に臨む時は直に小便を催ふして堪へ難くなつて來るが話を濟して元の席に復すれば全く之を忘れて引續き其儘で事務を執つて居る事の出來る人があつた予の治療したるヒステリー患者で四十歳の某婦人は數年來便秘の習慣があつて下劑を用ひざれば一週間でも通しがないが風の音が非常に嫌で少し風の强き日には兩耳に手を當て風聲の聞へない樣にして臥床する程であつて其時丈は却て度々下痢するといふた

雷の嫌な人が雷鳴を聞た時や刑事の被告人が死刑の宣告を受けた時などには劇烈

なる下痢を起す事がある斯の如く腦髓は排泄作用を支配するものである

英吉利ロンドンの醫士ドクトル、タッキー氏の書物には或る醫士が十三歳になる小兒の疣を二回までも切り取て治療したが其度毎に新しきものが出來て來た然るに田舍の老婆が咀呪の法を行ひしに數日にして其疣は消へ失せたといふ事が記してある我日本でも蜘蛛の巣を卷き付るとか或は茄子にて摩する樣な事をして疣を治して居る予の親籍なる漢法醫某方には秘傳と稱する疣の藥があつて一日に三包づゝ一週間即ち二十一包を服する時ば疣から出血して治るが若し一包でも服藥が足らぬ時は無効になるといふのである此藥は薏苡仁の粉末で他に配合物はないのである顧ふに是は藥其物の効ではないのであらう其故は服藥に定數があり又前に述べたるが如く腦の作用で皮膚より出血する事もあるからである

チャームスの化學者フォカコン氏は一婦人の左肩に郵便切手を貼付け催眠暗示に由りて火傷及び水泡を生せしめ之をリエボール氏ベルンハイム氏及びボーニス氏等の諸ドクトルに示した事があるチューリッヒ大學の教授フォーレル氏も同大學病院の看護婦に就て屢々同一の實驗をした事がある又リェーヂ大學のデルボーフ教授は一人の兩腕に同一の火傷を作り一方は醫方と共に催眠の治療的暗示をなし他の方には醫術的治療のみを行ひしに催眠暗示をなしたる方は直に治し醫術治療のみを施したる方は炎症及び疼痛に伴ひたる化膿の順序を經て治り方が十日間も遲くなつたといふ事である

日本には火渡の術といふのがあつて火の焔へて居る中を裸足で渡り左程の熱さも感ぜず又火傷を起す事もない其儀式は七五三繩を張り火伏の經文杯を稱へるのであるが斯る形式の爲め火熱の減少する譯ではなく焔火の中を通過するも熱を感ぜずとの觀念を附與する爲の方便である他方より言へば火熱に對する抵抗力を旺盛ならしむるのである而て最初に施術者が火中を渡り事實上に之を證明するゆへ他の者は益々火熱に對する抵抗力を強め遂に無事通過し得るに至るのである必竟するに熱度を

感ずるは腦髓なれば其腦髓に於て熱を感せざれば火傷も起らないのである例へば催眠術に於て疼痛無感の暗示を與へ置き筋肉へ針を突刺すも更に痛を感せざると同理である假令へ火伏の方式を行ひたりとて各人盡く無事に通過し得るものではない予の治療下に來りし名古屋市富澤町久世萬治郎氏は嘗て友人と共に遠州秋葉山に於て火渡をなしたるに多くの人は無事なりしも此二人丈は火傷したりと語れり古昔印度には熱鐵を抱かしむる所の裁判法があつて罪なき者は無事なるも眞の犯罪者は火傷を起し之に依て罪の有無を判決した事がある是等も矢張同一の原理に基て居るのである

遠江國二俣町に白痴の男子あり常に人々の施を受けて生活し居りしに或時鼻下に腫物(メンチョウ)を生し非常に痛がりて哭き叫び居りしを同町糟谷良平といふ人が之を伴ひ來り兩手の食指と拇指との間に澤山の灸をすへてやつた初め五六十位をすへて居る間は腫物の痛のみを感じて居つたが次第に灸の熱いのが分る樣になり終には全く腫物の痛みを忘れ灸の熱さのみを感ずるに至りしが夫がため腫物は程なく快癒したといふ話を直接に糟谷氏から聞た事があるこは腦髓の力が灸の方に集中して腫物に對する作用を休止したから治つたのである斯の如く皮膚上に現れたる有形の物までも變化を起して來るものである

明治三十九年七月の二六新報には次の記事が掲げてあつた

大鳥圭介翁の次子で過日物故した醫學博士大鳥次郎氏は自身胃癌である事を知つたので腸胃病院に施術を求めた主治醫は麻酔劑を用ひて切解して見ると胃癌が溺蔓して居るので手の着け樣がないソコで其儘縫合して了つた患者は覺醒して胃癌を切つたかと尋ねた主治醫は美事に切取たと答へたが患者は醫學博士だから堪らない夫では切取た病毒を見せよと言た主治醫は大に窮したが切り取たと言ふたからには見せぬばならぬ玆に究策を案じて他の患者から取つた胃癌を示した患者は大に安堵し是で大丈夫である最早全快疑なしと確信したので神經作用でもあら

うか日増に輕快に向つた人知れず胸を苦めて居たのは主治醫と院長と圭介翁の三人である他に知る者は一人もない患者自身は大得意で四月十四日に隅田川へ大學のボートレースを見に往き多くの知友から全快を祝された然るに其後患部が痛み出したので主治醫に問ひ復た病毒が生じたのであらうとの答を得ソンナ馬鹿な事があるものかと喝破したが夫から病勢が次第に重くなつたのだそうな

斯く手後になつたものでも腦の作用で一時輕快に赴たのである少くも輕快中は病勢を停止したのである

子は七歳の男子で口の周圍と耳とに瘡といふ腫物のある患者を治療したが少しも藥を用ひず總計十二回の施術で痂は乾燥脱落して平癒した又三十四歳の男子で三ヶ年前より夏期は毎年身体の各部に濕疹を發し粘液をも分泌して堪へ難き痒さがして種々の治療も効なきものを治療した事がある時は明治三十九年の六月で發疹を初めた時であつたが十日間にて治し暑中にも更に發する事はなかつた

島津齊彬公は性來極めて蜘蛛が嫌であつたが自から思ふに武士たる者が蜘蛛位を恐るゝは實に心外の至なりとて侍臣に命じ己れの身体を柱に縛り付させ少しも動けない樣にして一匹の蜘蛛を己れの手掌に置かしめしに其部分は終に腐蝕したといふこは蜘蛛に毒があつたのではなく極嫌なものは腦の作用で斯る有形的の變化を起すものである井上博士の著書には次の例が擧てある

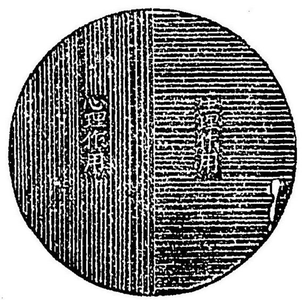
阿波の徳島に茄子が至て嫌にて甚だ恐るゝ者あり或時餘人戯れに其人へ茄子を打付たるに左の手首に常りて其所大に腫れ上り肉腐れ出して久しく難儀せしことありて右藩の人より慥かに聞留置きしとて或人の話なり

大要右に述べたるが如く消化作用、血液の循環、心臓の波動、呼吸作用、体温、分泌作用、排泄作用及び器質的の變化までも腦髓に於て支配して居るのである世人は心即ち心理作用が腦髓より起るものであるといふ事は既に承知して居るが一般に生理的作用を起す所の根本の力も亦腦髓に在るといふ事が以上述べたる事實に依て

了解せらるゝであらうと考へる斯の如く腦髓が全身体を總轄して居るといふ事は生理解剖の上から見るも心理の上から考ふるも實に明白なる所の事實であつて何人も異論のない事であらうと考へる即ち全身体を活動せしむる原動力の起る所は腦髓である故に心も腦髓の力である記憶力、思考力、判斷力等も腦髓の力である其他五官の働きから身体手足を動かす所の運動、及び内臓機關の活動も其原動力は腦髓に於て起るものである一般に言へば心理生理の作用を起す所の根本は腦髓である

了解し易き爲に略圖を以て說明せんに第四圖の圓形を以て腦作用の全部を示すも

第四圖



のとすれば一部は心理的即ち無形的の作用をなし一部は生理的即ち有形的の作用をするのである一層分り易く言へば一の電氣力が音聲を數十百里外に傳達する所の無形的の働き(電話)と電車を運轉するが如き有形的の働とをする樣なものと考ふれば容易く理解せらるるであらうと思ふ但し腦髓は全体として作用するものなるや將又腦髓中に分業の行わるゝものなるやは現今の生理的心理學上未だ審かならずと雖も治療上に就ては何れにするも大なる關係はなからうと考へる

分り易き爲に腦髓の作用を分類して示す時は次の如くなるのである

- 心理作用（有意的）
  - 觀念
  - 感情
  - 意思
  - 意思に基く諸運動
  - 意思に基く分泌排泄
  - 其他有意的に屬するもの

- 腦作用
  - 生理作用（無意的）
    - 呼吸
    - 消化
    - 血液循環
    - 其他內臟機關の作用
    - 体温及び發熱
    - 無意的運動（痙攣の如し）
    - 無意的分泌（發汗の如し）
    - 其他無意的に屬するもの

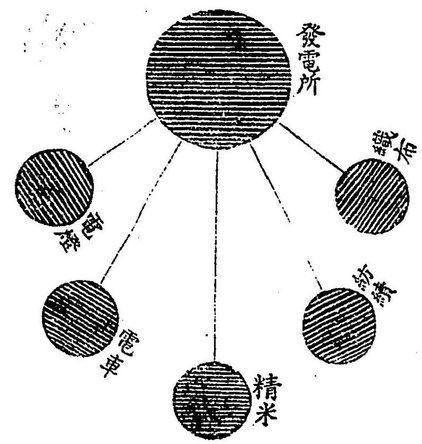
右の如く分類したれども實際に於ては常に確たる分界のある譯ではない例へば悲哀の觀念から涙の分泌するは普通なれども極度の喜悅が涙の分泌を促す事があり病的にも分泌する事がある支那臺灣抔に於ては哭き男と稱し意の如く涙液を分泌せしむる事の出來る者もある又分娩後約一ヶ年以內の幼兒は殆ど機械的に大小便を排泄するが少しく成長すれば有意的に排泄する樣になるドクトル、モール氏は催眠暗示に依り不隨意筋たる腸を動かした事があるといふて居る人類の耳は通常動かす事能わざるものなれども千萬人中の一人は任意に（恰も犬猫の如く）之を動搖し得る者がある故に心理生理若くは隨意筋不隨意筋と區別して居るが必竟するに腦髓の力が種々に變化して是等の作用をなすこと恰も電氣力が種々なる働をなすに等しきものと考ふるを良とす

腦髓が全身体に作用する所の狀態は電氣の作用に比較して說明すれば最も理解し易からうと考へる即ち腦髓の力が全身体を活動しつゝあるは恰も電氣力が種々なる事に應用せらるゝと同じ譯で發電所より諸方へ電線を架してある所の狀は腦髓より各局部に神經纖維が達して居るのと同一の形狀である（第一及び第三圖と第　圖とを彼是れ參照すべし）

今發電所に於て電力を起す時は其力が電線を傳つて各所に達し或は電燈となり或は電車を運轉し或は米を精げ或は糸を紡ぎ或は布を織る樣な種々なる働きをなすと

同じく人体内に於ては腦髓の力が神經纖維を傳つて各局部に達し或は五官の働をなし或は手足を動かし或は肺が呼吸の働をなし心臟が血液を循環し胃が食物を消化する樣な作用を起さしむるのである

第五圖



發電所に於て起る所の電氣力が弱くなれば電燈の光も暗くなり電車の速力も遲くなると同じく種々なる原因から腦髓の力が衰へ或は其作用上に錯りを來す時は或局部の活動が不良となつて病氣となるのである手短な例を擧ぐれば投機商が自身の見込通りの相場が來て都合よく儲かる時には誠に勢がよく至て健康であるが一朝相場の模樣が變つて資産を失ふ樣な事になると俄に氣分が寒いで飯も喉へ通らぬ樣になり終には氣がフレたり或は肺病心臟病抔になる者が隨分ある

茲に注意して置かねばならぬ事は「同一の原因は必しも同一の結果を生ずるものでない」といふ事である例へば數匹の兎を置き其傍で大砲を放つに或ものは鼓膜を破りて聾となり或ものは視神經の作用を失ふて盲目となり或ものは直に腦作用の錯りを來して痴となるが如く人類に於ても非常な心配の爲め發狂する者もあれば或は肺病、心臟病となる者もあつて人々其結果となつて現わるゝ所の病氣は相違するのである是は重に比較的構造の薄弱なる部分若くは特に精神の集中したる局部に病的となつて現われて來るのである

既に說明した通り腦髓は全身体を主宰しつゝあるものなれば總ての刺戟に對して

も亦腦髓が反應の中心となるべきは當然の事である刺戟には有形と無形、自發と他發とがあり又意識に上るものと否らざるもの、健康に益するものと害するもの等の種類がある愉快な語を聞くが如きは無形、他發、有意識、及び有利の刺戟で氣分も爽快となり食も進みて健康に可なれども、自から悲觀的の狀態に陷り（無形、自發、有意識、有害の刺戟）或は他より心配な事件を持込まれたる時は（無形、他發、有意識、有害の刺戟）氣分塞ぎ食慾乏しく其他不健康の狀態を引起す樣になる概して言へば快感は生活狀態の進歩を示し不快感は其退歩即ち病的傾向を呈するものである

米國ミッチエル博士は多年研究の結果恐猫病とも名づくべき珍しき病系のある事を發見したといふ事である此病は其名の如く猫を恐るゝ病で近所に猫が居れば其姿は見へずとも之を嗅き出だし忽ち頭痛嘔吐を催ふし鬼をも挫ぐ荒男が慄へ出すそうである道は恰も蟇、蛇、蜘蛛、芋虫等を見れば身慄ひがして顏の眞青になる人があると同じ譯で特に其物に對する恐怖心即ち腦の抵抗力が弱いからである斯る人は其物の繪畫を見た計りでも同樣の症候を起す事がある井上博士の著書には次の例がある

享保の頃御先手を勤められし鈴木氏は極めて百合の花を嫌はれしが或時茶會にて四五人集まり！折柄吸物出でゝ何れも箸を取りしに鈴木氏は殊の外心持よからず顏色も惡く箸も取り兼て主人に向ひ若し此吸物に百合の根などはなきやと問ふに主人は兼て嫌は承知の事なれば其樣なものは決してなしと挨拶に及びけるが一座の内に膳の模樣に百合の花を畫きたるを見出し人々驚きて早速其膳を引かせければ忽ち快くなりし由耳袋といふ隨筆に出たり

雷鳴の嫌な人は未だ一點の雲も出ない内から氣分が惡くなり又腦病患者の内には翌日の天候を己れの氣分に由りて豫知する人が往々ある是等は腦髓が空氣の變動を無意識的に感受（即ち空氣の刺戟）して氣分が變つて來るのである尤も空氣の變動は

何人の腦髓をも刺戟するのであるが腦の抵抗力が強い人には知覺する程に氣分の變化を起さないのである

寒冷なる空氣の刺戟に相遇すれば寒冒に罹る事がある勿論他發の刺戟であるが寒冷を自覺したる時と(有意識的)否らざる時とがある(無意識的)此刺戟は有形無形の何れとするも殆んど差支へはない蓋し有形といひ無形といふも必竟比較的に判斷したる言葉に過ぎないからである而て假令へ寒冷なる空氣の刺戟に遇ふも風を引く時と引かぬ時とがある虎列刺患者に接し若くは其病菌を嚥下するも感染する者と否らざる者とがあり肺病に就ても亦同一である

戰爭中は皆氣が張て居るから腦の抵抗力が強くして病氣に罹る人も少ないが休戰媾和等になると氣が弛で腦の抵抗力が衰へるゆへ病人が多くなる古來何れの戰役でも其通である日露戰爭の時も比較的溫暖なる內地へ歸還してから却て寒冒に罹る人が多かつた又發狂其他の病氣を呈した者も隨分あつた通常の場合でも事業に熱心して居る間は身体を無理に使つても之に堪へて居るが先づ是で良いと心に弛みが出ると病に犯される樣になる昔から「ポット思へば死ぬるべし」といふ諺がある予の見たる三十歲の男子は至て壯健で永年酒問屋に奉公し年期を勤め上て別家し妻を娶り一人の小兒も出來て安心したので終に肺病となつて死んだ即ち心が弛めば腦の抵抗力が弱くなるからである故に人は常に勇氣を付て腦髓の力を旺盛ならしめ且適當の攝生法を守つて居れば病に罹る事も少く長生をする事も出來るのである

悲哀なる事實を見聞すれば涙が出る千代萩の淨瑠璃にも政岡が我子の殺さるゝを見て居ながら涙一滴目に持たぬといふ事がある即ち悲哀の刺戟に對する腦の抵抗力を強むれば之に打勝つ事が出來るのである

傳染病患者の所へ往く時酒を飲んで居れば感染しないと世間で言ふて居るがこは酒精に殺菌力があるからではなく酒の爲に一時興奮して氣が強くなる即ち腦の抵抗力が旺盛になつて居るからである

咀呪の法に疫病のある家へ往には左の手掌に指先にて「我是鬼」と三字書く眞似して之を堅く握つて居れば決して傳染しないといふ事がある即ち意思を強め且手を堅く握つて居るゆへ少しも氣の緩む時なく常に腦の抵抗力が強くなつて居るから傳染を防ぐことが出來るのである此有害的刺戟と之に對する腦の抵抗力との關係は恰も吾人が社會に立て常に生存の競爭をなし優勝劣敗の狀態下に在ると同じ事である

概して意思の強き者は病に冒さるゝ事少なく之に反し意思薄弱にして殊に病を恐るゝ者は即ち腦の抵抗力が弱いのであるから傳染病にも感染し易いのである栃木縣下に於て虎列刺病の檢疫に從事したる某醫が醫學雜誌に掲載したる記事に依れば數十名の豫防委員中特に同病を恐怖すること甚しかりし三名は終に本病に罹りしが他の委員は盡く無事なりしと又虎列刺流行時に當り本病にて死亡したることある某家に來客ありて一泊したるに翌朝或者來り甚だ驚きたる風情にて此寢具は虎列刺患者に用ひたものだと言ひしに客は忽ち顏色青醒めて吐瀉を發し終に眞性の虎列刺病になつた然るに此寢具は其實虎列刺患者に用ひし品ではなく全く清淨のものなりしといふ今日の樣に黴菌々々といふて猥りに世人を恐怖せしむる時は益々腦の抵抗力を薄弱ならしめ却て其蔓延を幇助する譯になるのである

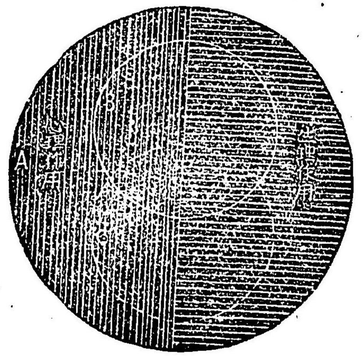
要するに疾病は有害的刺戟に對する腦髓の抵抗力が薄弱なるに由て起るのである吾人の睡眠中は腦の作用が或る程度まで休止して抵抗力が弱くなつて居るから假眠をすると風を引き易いのである小動物例へば南京鼠でも車を轉回させて疲勞せしむる時は脾脱疽菌に對する固有の抵抗力を失ひ其病毒に感染し易くなる故に人類に在ては常に意思を強固にし其他腦を健全ならしむる所の方法に注意するは疾病の豫防上最も必要なる事柄である

日常吾人は絶へず種々複雜なる刺戟に相遇しつゝあるを以て之が反應の中心たる腦髓は常に其影響を受け時々刻々腦作用の變動を起して居るのである而て刺戟の中には健康上に有利なるものも混入し居るものなれば其變動の小なるものは再び健康

時の作用に復する事を得れども稍大なるものに在ては容易に復歸せずして永く腦髓中に於て病的の作用を繼續して居るのである

第六圖のA圓形は腦作用の全部を現わしたもので既に第四圖を以て説明したると同じく此内には心理と生理との二つの作用を含有して居るのである尤も腦作用は全部盡く活動して居るものではなく其内の或部分丈が働て居るのである今B圓形を以て健康時の腦作用とすれば氣分も爽快にして（心理作用）血液の循環、胃の消化力も善

第六圖



良に、大小便も適度に通ずるのである（生理作用）、然るにC圓形の如き病的の作用を營む樣になれば氣分も惡くなり（心理作用）、胃の消化力も鈍くなつて食慾乏しく或は腸の蠕動運動も緩急其度を失し便秘若くは下痢を起す事になる（生理作用）是等の作用は皆腦髓に於て司どつて居る事は既に説明した通りである大要右の如き譯であるから一般に内科的疾病は根本たる腦髓に於て病的の作用を起して居るのである

（生理的に言へば腦細胞中の變化）

發電所の電氣力が強くなれば電燈も明るくなり電車の速力も早くなると同じく原動力たる腦髓の力を強め若くは其作用の錯りを正せば各部の活動が良好となつて病氣が治つて行くべき道理である即ち第六圖に於て病的の作用をなしつゝある所のC圓形をB圓形の位置に持來す時は根本に於て健康的の作用を營む樣になつて全身体が健康になる譯である

注意の爲め述べて置くが神佛に祈願して病氣の治る事はある我國にても天理教其

他の宗派に於て行つて居り又現今米國抔に於てはクリスチアン、サイエンスといふて神に祈て病氣を治す事が盛に行われ歐州に於ても醫藥の効なき時は神に依頼する所の習慣があり而して其内の或る者は全快する事がある然し是等は總て神佛の力が病を治したのではなく社會の心理的智識が尚幼稚で神佛の加護に由り己れの病苦を救わるべしと深く信ずる所の自發的刺戟に由り腦髓中の病的作用が健康的作用に轉ずるから治るのである要するに神佛の力なる客觀的の作用ではなく實は主觀的即ち自身の信仰力に由て治癒するのである然れども是等は皆迷信的に屬するものなれば極めて信仰心の高まりし時に於てのみ始めて効能が現わるゝので且其病症に對しても適切の治療を施す事は出來ないのである故に少くも文明の人民は學理に基きたる確實の療法を採用せねばならぬのである

近來諸國に於て稱道せらるゝ所の催眠術治療なるものは或る程度まで腦の心理的作用を休止させて置て治癒的暗示(即ち有利なる無形的他發刺戟)を與へ腦中の病的作用を轉じて健康時の作用を營む樣にするのである斯く腦の作用が休止して抵抗力が弱くなつて居るから容易く治癒的刺戟に感應して偉大の効を奏する事になるのである之を夢の場合に就て考ふれば容易に理解する事が出來るので何人も能く實驗して居る如く恐怖の夢を見れば醒めて後も動悸が劇しく且つ汗が出て居る悲しい夢を見れば涙が流れ後までも氣分が惡く愉快の夢は精神を爽快ならしめ手足を切られた夢を見れば目が醒てからも其局部に痛を感じて居り蒲團の外へ足先が出て寒冷を感ずれば雪中を歩行する樣な夢を見る概して夢は針程の事を棒に見る傾のあるのは腦の作用が休止して抵抗力が衰へ刺戟に感ずる度が強いからである發狂者の如きは豫て心に掛る事があつて其事を夢に見て夫より發病する事が甚だ多いのである即ち夢の意識は腦を刺戟する事が最も強いからである催眠術治療も之と同じ譯であるが催眠術では術者より刺戟を發するものゆへ患者が術者を信頼するの厚薄に依り其効能に相違を生ずるものである兎に角催眠術は學理的に腦作用を變更し得るもので社會

の智識が進歩するに從ひ益々治療上に最必要のものとなるのである

斯くて前に說明せし如く腦髓は消化作用を支配するから腦を基礎として治療し胃の活動を强めて胃病を治す事が出來る、血液の循環を支配するから頭部の充血即ち逆上を下る事や血液の不足して居る部分即ち多くは痲痺して居る所へ能く血液の循環する樣にして之を治す事が出來る、心臟を支配して居るから動悸を靜め鼓動の不正をも治す事が出來る、肺の活動を善くすれば肺病が治り、腎の働を善くすれば腎臟病が治る、腦、神經系に屬する疾病の如きは無論の事である体温を支配するから發熱を治する事が出來る是迄の療法では諸種の解熱劑を用ゆるのであるが唯藥力に由て一時之を抑へておき自然の恢復を待て居るのである然し實際は仲々熱の下らぬ事がある否一時抑へた反動で却て熱度の以前よりも高くなる事がある又身体の虛脫を來すものである

分泌作用を支配するから寢汗が出たり或は常に涙の出るものを止る事が出來る是迄の療法では涙の出る者には下瞼より鼻腔内に通ずる細管へ棒を挿し込で管内を擴げ涙の流れ道を大きくしようといふ考で治療をして居る故に涙の出るのを止めるのではなく唯痛いのみで効がないのである又胃液の分泌を多くして消化を善くする事も出來る

排泄作用を支配するから尿量を增減し或は寢小便抔も治す事が出來る又嘔吐、便秘、下痢等を治す事が出來る通常食道は食物を胃の方へ送る所の働をするのであるが逆な運動を起す時は嘔吐する事になるのである恰も瀉關車が僅かなる器械の變化に依り後方に逆行するのと同じ樣な譯である、便秘するのは腸の蠕動運動が衰へたからであり下痢は此運動が過敏になつたからである是等の運動は皆腦に於て司どつて居るから腦髓より治療すれば容易く治るのである其他殆んど一般に內科諸病を根本から治療する事が出來るのである

分娩の事も腦髓に於て支配して居るので適當に治療すれば安產が出來る初めて之

を試みたのは獨逸ミュンヘンのドクトルでシュクレンク、ノッヂングと云ふ人である一八九一年十二月十七日に或る商人の娘で二十五歳の姙婦が分娩時の苦痛を免かれたいとの希望で治療を受に來た同氏は夫より七回の催眠治療を行ひ同月二十八日に產の催ふしが來た時も術を施し催眠中に分娩させたが少しの苦痛もなく其後母子共に健全なりしといふ我國には昔から子安觀音又は安產の御札抔があつて信ずる者には多少の効を現わして居る元來分娩は女性の天職なれば殊更に大なる苦痛はない筈で現に犬猫の如きは至て產が輕い然るに人類は神經が過敏で姙娠の初より分娩時に至るまで此事を苦にして居るから腦の作用で之を重くするのである故に分娩時に非ざるも其以前に治療して効を奏するものである又分晩の爲め病氣となり若くは逆上して生命を失ふ樣な事や或は流產抔も豫め治療して之を防ぐ事が出來るのである

又外科に屬する創傷の如きも癒合の作用を起すは矢張り腦髓の力に基て居るのである故に腦髓の力が衰へて居る者は癒合が遲く中には手術後數月若くは數年間其一部の癒合しない人がある勇氣のある人は傷をしても平氣で居るから早く治り氣の弱い人は非常に痛がり爲に益々局部の充血を來し治り方が遲くなる日露戰爭の際負傷者の治療に從事したる軍醫等は明に斯る事實のある事を述て居る故に外科手術に於ても腦髓の作用を應用する事が必要である

斯の如く腦髓の力は各方面の治療に向て確實且安全に應用せらるべきものである故に今日に於て未だ明に論定する事能わざる寄生蟲の如きは暫らく例外とするも予は特に內科的疾病に於ては是非とも腦髓を基礎として治療すべきものである

是れが治療上の最大原則である

大体に就て分り易く例へて言へば腦髓は恰も軍隊に於ける總指揮官の如きものである軍隊にては一兵卒の行動も元は總指揮官の命令に基て居るのである今兵卒の行動が地方の利害に關する事があつて此行動を止めさせ樣と思ひ直接兵卒に掛合ても仲々運びの附くものでない何となれば此兵卒は總指揮官の命令に從つて行動して居

るのであるから他より之に容喙するも應じないのである故に兵卒に向て彼是れ言ふよりも直ちに總指揮官に照會して地方の害となる樣な命令を取消して貰へば却て事が迅速且つ確實に運ぶのである病氣の治療に於ても道理に變りはない即ち人体内の總指揮官たる腦髓を基礎として治療すれば容易く且確實に病苦を除く事が出來るのである

此事は獨り理論上に於て然るのみに非ず予は實地に於て腦、神經系病は勿論其他胃病、肺病、心臟病、肋膜炎、脚氣、黄疸、糖尿病、腎臟炎、腹水病、瘰癧等の諸病に向て着々効果を示して居るのである虎列刺病、狂犬病、黑死病の如き急性傳染病は未だ機會を得ず且法律の制裁があつて之を試みる事能わざるも予の發見したる原理も療法とに由れば慥に治療し得べしとの意見を有して居るのである

抑々腦髓が人体内に於ける最高の主部であるといふ事は恰も太陽の諸惑星を總轄し帝王の衆民を支配するが如き有樣になつて居るのである故に此最高部より治療するといふ事即ち大本たる腦髓を基礎として治療すべきものであるといふ予の發明したる原則は今後何程學術が進歩しても決して動かすべからざる所の眞理で萬世不易の根本的大原則であるといふ事を茲に斷言して置くのである

以上述べたる通りの譯であるから從來の醫術に於て藥力を用ひ一時病勢を抑へて居つて自然の恢復力を待つといふのは即ち腦髓の病的作用が健康的作用に復するのを氣永く待つて居る事になるのである而て何程待て居ても回復せざる場合が甚だ多いのである予の發見したる學理と療法とに於ては自然の恢復を待つて居らずして直接に健康的作用を營む如く治療して行くのである（第六圖參照）即ち腦髓を基礎として其力を強め其錯りを正して行く所の根本的治療である故に確實且迅速に治療が出來るのである

醫術に於て腦髓が神經組識の根本であるといふ事は今より約二千二百年前歴山府の大解剖家ヒロフィラスなる者初めて人体解剖をした時既に發見したのであるが腦

髓は如何なる作用をするものであるかを深く研究せず隨て此作用を治療上に應用することなく唯有形的に解釋し有形的の方法のみを以て治療し來りしゆへ二千餘年後の今日に至るも尙治療上の原則を見出す事が出來なかつたのである詰り從來の醫術は根本に着目せず唯枝葉に向て治療の術を施して居るから實際に於ても一向治驗が擧らないのである即ち醫術は根本的治療に非ずして枝葉の治療法で此根本を忘れて居るのが醫術上の最大誤謬である

又從來の醫術に於ては動物試驗といふて兎、モルモット、南京鼠等に就て實驗したる結果を直に人類に適用せんとして居るのであるが是等の動物と人類とは腦髓の組織が非常に懸隔して居り且つ動物に在ては言語が通ぜず又觀念上にも大なる相違があつて假令へ己れの病苦を除く爲に施さるゝ所の手段も人類以外の動物は其意を解せずして却て之を厭嫌するものである尙又心理に關する事は動物を用ひて試みる事の出來ぬものである故に動物試驗の結果を直に人類に應用するは決して適切でなひ佛國ナンシー醫科大學教授ドクトル、ベルンハイム氏曰く「醫士にして心理の素養なきは最大の缺點にして斯る醫士は人類の疾病を治療するの醫士として尊敬するの價値なく恰も犬猫の如き動物の獸醫たるに適するのみ」と

現今の人々は治療上の眞理を一解せず概ね皆人間らしき治療法を受けずして犬猫同樣の療法に甘んじて居る夫が爲め治るべき病氣も治さずに居るは實に憫然の至りと言わねばならぬ是れ予が世界人類の爲め新學說を發表して治療法の改良を主唱する所以である扨予が治療上の原則を發見したに就ては從來の病理と療法とに大變革を起して來たのであつて最も喧しい肺病の事は特に章を設けて詳細に述べる事とし其他數種の重なる疾病に就て從來の療法に誤りある事を次に說明しようと思ふ（他は之に依て類推せよ）

予は此原則を發見し之を世界へ發表せんとして大隈伯を訪問し學理の大要を述たるに伯も大に贊成の意を表されたる再度訪問せし時伯の曰く該學說を醫學博士靑

山胤通氏(醫科大學長)に語り大議論をしたが青山博士は「腦細胞が如何に變形して腦のエネルギーが起るのであるか今日の學理にては不明である故に直に腦髓を以て治療の基礎となすべしと論ずる譯には行くまい」との意見を述べたと予に語られた依て予は伯に向て大要次の如く述べた勿論腦生理といふことは今日に於て審かならざる問題である殊に其細胞が如何に變形するかといふが如き事は永久に不明であるかも知れぬ現に心理學者中には斯る說を稱へて居る者が往々ある抑々腦作用は千態萬狀にして喜ぶ時あり悲む時あり笑ふことあり怒ることあり其他五官の働きより身体手足を動かす等人体内に起れる百般の出來事は皆腦のエネルギーに由て起るものである斯く種々雜多なる作用に對し例へば喜ぶ時には腦細胞が三角となり怒る時には四角になり手を動かす時には圓形となり足を動かす時には隋圓になるといふ樣に數限りなき腦作用に對し一々細胞が如何に變形するかを知らんとする事は到底不可能である況んや他の動物に於ては感情の表出が審かでな

いから動物試驗に由り之を研究する事も亦不可能である今一歩を讓りて腦細胞が種々に變形する所の狀態を知り得たりとして例へば喜ぶ時には腦細胞が三角になるとの事實か分つたとするも細胞が三角になれば何故喜悅の作用を起すかといふ事は矢張不明である故に細胞の變形狀態を知り得たりとてエネルギーの起つて來る原理は尙不明にして實際に於ても些の益する所はないのである、元來予の學理は細胞より立論したのではない旣に本章中に述た通り何人も確實に認識し得る所の自明の事實例へば喜ばしい時には氣分が爽快であり胃の消化力も强くして食解進み、心配のある時には氣分が塞ぎ頭痛や不眠を起し消化力も衰へて食慾が乏しくなる其他本章中に記せし如く消化、呼吸、血液循環、体温、分泌、排泄等の如き殆んど總ての事柄が腦に於て支配されて居る事が明である斯る明白なる事實及び剖上に於ける神經組織の狀態を根據として立論し根本たる腦髓を基礎として治療すべきものである是が即ち根本的の治療にして治療上の原則であると論じたの

である故に青山博士の意見は予の學理に於ては少しも支障を感じないのである予は尚充分に有力なる反對說の出で來らん事を希望する何となれば相互に論難して治療上の眞理を攻究し社會に貢献したいのが予の目的とする所であるからである故に世界各國へ學說を發表して廣く學者社會の意見を徵する次第である以上は大隈伯に對へたものであるが玆に附記して讀者の參考に供する

第二章　內科新病理

●神經衰弱　本病に對し是迄の醫術に於ては如何なる藥を用ひて居るかといふに重に臭素加里である此藥は消化不良即ち胃を惡くする所の害があるから通常苦味丁幾（消化劑）を配合して居る元來臭素加里は輕き麻醉劑で腦の感覺を鈍くして例へば頭の重いのや頭痛抔を知覺するの度を弱くするのである故に腦を健全にする藥ではなく却て其作用を弱くするのである

●藥物學にも臭素加里を連用すれば慢性中毒を發し其狀は腦沈鬱と皮膚知覺麻痺の症狀、氣管支加答兒、消化障害、下痢、貧血等を起し大量即ち一〇、〇乃至二〇、〇を投ずれば嘔吐、下痢を來し腦の沈鬱更に著しく体溫低下、呼吸減少、記憶力、思考力、淫慾共に減退し言語困難となる等の事が記してある即ち臭素加里を用ひて居る程人間が馬鹿になつて來るので却て腦を惡くする藥である學生抔が神經衰弱を治

そうとして服藥して居るのは實に大間違である又實際に於ても効がないのである

醫書にも本病は直接に生命を奪ふ事はないが多くは癇疾にして殆んど治癒の望がないとしてある予の療法では直接に腦を健全にするのであるから確實に治す事が出來るので少しの害もなく尙他の部分も盡く善良に向ふのである大抵二週日前後で全快し其實例は甚だ澤山あるが予の病理は主として道理の上から論究するので實例には餘〻重きを置かず且煩雜であるから必要なる場合の外は省く事にする

神經衰弱は失望、失戀、不平、忿怒、悲哀、恐怖、心勞、過飲、過房、手淫、睡眠の不足、過度の勉强、阿片莫爾比涅の濫用、生活の困難等の如き有害的刺戟の爲に腦髓の力が衰へたのである而も世の進むに從て益々過度に精神を勞する樣になるから本病は增加する一方である米國杯では一分時間も徒らに費さぬといふ風で常に氣を使つて居るから殊更本病に罹る者が多く一名を米國病とさへ稱ふる位である投機商杯が損をする時には直に神經衰弱の症候を起して來るが儲かる樣になれば頓に消失する事がある即ち刺戟の善惡に由りて斯く俄に變化するのである旣に第一章中にも說明せし如く腦髓は刺戟に感應して何れにも其作用を變ずるものなれば有利なる有形無形の刺戟を與へて腦の力を强くすれば本病の治療せらるべき事が實に明白である

本病には耳鳴の症候を伴ふ事が往々ある醫術に於ては耳の中を洗ひ或は鼻腔内より鼓膜の内方へ空氣を送る樣な療法をして居るが更に効がない抑々耳鳴は腦髓が衰へ特に聽覺中樞の作用に錯りを來したのであるヒステリー患者の如きは或る意味を有する言語の聞ゆる事さへ往々ある故に鼓膜から耳鳴が起るのではなく根本たる腦髓の聽覺作用が錯つたからである然らば鼓膜に空氣を送りたりとて治るべき筈はなく腦髓より治療して聽覺作用の錯りを正せば確實に治す事が出來るのである

又本病には陰萎若くは遺精の附隨する事がある旣に說明せし如く生殖器の事も腦髓に於て司つて居るので色慾の情が起れば局部に充血を來し精液をも分泌する樣に

なるのである然るに腦髓の力が衰へ或は其作用に錯りを生ずる時は能く局部に血液が集らず或は精液が漏れる樣な事になるのである故に腦髓の力を強めて其作用を適當にすれば治癒せらるゝ事になつて來るのである藥劑は無論實際に効がないのであるが假令へ多少の効があつたとしても唯藥の氣が体内に存在して居る間丈の事で斯る症候を治した譯ではないのである予は之に反し六十餘歳の老人で過度に色情が起り却て困るといふ者を治療した事がある是も矢張り病的で腦の作用が右に向たのと左に向たのとの相違である

先年京都醫科大學の教授中西醫學博士は本病に關し「神經衰弱は醫藥で治す事は出來ない唯一の療法は書畫、骨董、藝者、園藝等己れの欲する所の道樂に耽りて萬事を忘るゝに在り」といふて此記事が新聞紙上に載てあつた其當時予は之を駁し本病は精神上の刺戟若くは過勞等より引起す事が多いもので生存競爭の劇しくなるに從て益々增加する既に現今に於ても下級官吏や學生抔に澤山ある然るに博士の如く樂天的に道樂說を稱ふるは專門家として甚だ無責任であるのみならず未だ研究の足らないのであると論じて置た

既に屢々述べたるが如く腦髓は全身体を主宰する所にして治療上最も重要なる部分である然るに從來の醫術に於ては根本たる此重要部を治療する事が出來ないのである故に其他の疾病も亦治療する事能はざるは寧ろ當然の事である

●神經痛　僂麻質斯　此二症には安知必林（アンチピリン）、安知歇貌林（アンチフェブリン）、撒里矢爾酸抔（サリシルサン）を重に用ひて居る是等の藥劑は解熱劑であるが痛を止る目的にも使用し或は沃度丁幾、イピチオール等を局部に塗る事もあるが更に効なき事は人々の能く知て居る所である醫書に於ても豫後は概ね不良としてある殊に安知は集積作用があるから小量を連用するか或は大量を與ふれば中毒を起し頭部昏憒、顏面藍色及び衰弱の症候を呈し眼球藍色を呈する事がある又人によつては皮膚に紫色の斑點を生ずる事もある

抑々本病は根本の腦髓が弱つたから起るもので恰も木の根が弱れば枝葉が衰へて

來るのと同じ譯である故に腦髓より治療するのが正當で且容易に治療せらるゝので
ある齒痛、頭痛も神經痛である殊に齒痛の如きは大抵一回の治療で治る其他顏面神
經痛、肋間神經痛、坐骨神經痛等の如き十日內外で治癒するものである

內科全書にては僂麻質斯を傳染病の中に組入れてあるが予は大なる誤りであると
思ふ醫書にも「細菌學的研究に據れば之が原因たるべき特異の分裂菌なくして膿腐
菌即ち之が起病原なるが如し」と極めて曖昧に記してある予は一種の神經痛と見る
が適當と考へる齒痛の如きも單に疼痛のみを感ずるのがあり或は齒若くは頰の腫れ
る事があるのを見ても分る既にインメルマン氏及びエドレッフセン氏は假面性關節
僂麻質斯なるものがあつて種々の形狀を帶びて現われ屢々神經痛殊に三叉神經痛と
なつて發生するといふて居る又多くの患者も寒冒及び心身の過勞より本病を起せし
事を稱ふ即ち是等の原因に由り腦の衰退を來した爲である故に腦を基礎として治療
すれば容易に治癒するもので予は急性慢性共數多治驗の實例を有して居るが約ね三
週日以內に治し夫以上の日數を要するは極めて稀である

手足を切斷した人が其後に至り身體に附着せざる局部の疼痛を感ずる事が往々あ
る大隈伯の如きも斯る事實のあつた事が數年前の新聞紙上に揭げてあつた斯樣に局
部の存在せざる神經痛もある唯腦髓に於て痛を感ずる丈であるから局部はなくとも
神經痛は成立する事が出來るのである此例に由るも腦を基礎として治療するの正當
なる事が分るのである

英國ドクトル、タッキー氏の著書には兼て神經痛に惱める英國の貴夫人が或時短
艇に乘て船遊をなしたるに非常に動搖して屢々轉覆せんとしたので婦人は大なる恐
怖心を起したが夫が爲め神經痛は永久に治癒せられたといふ例があるこは恐怖の刺
戟に由り腦髓の作用に變動を起し病的作用が消失して治つたのである（第六圖參照）

ハンブリー、ダヴィー氏が笑氣瓦斯（酸化窒素）を顏面神經病の患者に就て試みよ
うとして先づ患者の体溫を檢する爲に体溫器を口中に含ませ置しに患者は無敎育の

者で今口中へ体温器を入たのを珍しき新治療法をして貰て居ると思つたので數分時の内に顔面神經痛が全く治つたといふ事もある

紐育醫事新報の記事に僂麻質斯に罹れる一婦人が「マンチェスター」から倫敦へ向けて滊車にて出立したるに途中で滊車が衝突して婦人は車内の一隅より一隅へ跳飛されたが其時より病氣は全く治つたといひ又有名なグランド將軍がアポマトックスで劇しき僂麻質斯に惱で居たがリー將軍が降伏したとの報告を得て非常に喜んだので病氣は永久に治癒せられたといふ事があつた此二例も亦過度の驚愕及び喜悅の爲め腦作用に變動を起して治つたのである若し微菌から本病を發するものとすれば斯く俄に治るべき筈がない

又亞米利加の一農夫は多年慢性の僂麻質斯に惱で居たが或時誤て蜜蜂の巣を壞し蜂は怒て劇しく農夫を螫したが此時より僂麻質斯は拭ふが如く全快したので不思議に思つて醫士に此事を語り遂に刀圭社會に紹介せられて蜂より分泌する毒液を注射する療法を行ふ樣になつたといふ

然れども此毒液が僂麻質斯に効がある譯ではなく蜂の螫したる疼痛の刺戟で腦作用が變動して治つたのである故に唯毒液の注射療法を行つても工合よく治るものではない詰り目に見へる丈の所で考へるから眞正の治療法を見出す事が出來ないのである斯る淺薄なる觀察法を以てすれば船を動搖させ滊車を衝突させる事も神經痛や僂麻質斯の治療法といふ事になる實に愚の至りと言わざるを得ないのである故に何人も己れの身体を保護する上に就て治療上に關する眞理の大要を心得置き間違つた治療法を受けて自身の不利益を來す事のなき樣に心掛ねばならぬ

大略右に説明した通りの譯であるから腦髓を基礎として治療すべきものである然るに藥物的治療で効がない所から外科的手術を行ひ神經痛には其纖維を切斷し僂麻質斯には局部を刄針にて切り此所より血液を吸出する樣な療法を行ふ者がある抑々本病は根本の腦髓が衰へたから起るので上に掲げたる實例幷に病の初期には疼痛の

局部が所々に轉位するを見ても明かに分るのである然るに唯枝葉たる局部のみに着目して治療したとて治るべきものでない恰も木の枝が枯そうになつた時に樹の根を培養せずして樹枝に藥を塗り付るのと同じ譯で少しも効はないのである醫師の中には金儲のみを目的として内科病に外科手術をするのが一番金が取れる抔といふて居る者がある實に不都合千萬であると思ふ假令へ斯る惡意がないにしても病の根本を知らずに治療しては治るべき筈がないのである

●喘息　本病に就て或醫士は次の如く述て居る「沃剝、臭剝、鹽莫等の内服、硼酸若くは古加因の子宮注射、發作時に於ける撒里矢爾酸古加因又は莫爾比涅の皮下注射、格魯剌兒の頓服、印度大麻煙草の喫煙等苟も醫書に記載せる方法は殆ど用ひ盡したが一も特効がない就中印度大麻、格魯剌兒の如きは一時の緩みは附くが已にして醒覺すれば其苦悶再び舊に復し到底之を用ひない方がよい唯吐根末一、五を三包に分ち喘息の發作し來りし時十五分時毎に一包宛を用ひて吐かせる時は効がある即ち數回の吐を來すや患者の苦悶は實に名狀すべからざる程であるが已にして吐が鎮まれば安眠を催ふして回復する」

此樣に述て居るが抑々吐根末で偶々效を奏したのは如何なる譯であるかといふに藥を以て無理に吐かせるのであるから其苦痛は喘息の苦痛よりも數倍劇しいのである即ち吐を來すや其苦悶は實に名狀すべからずとある如く非常な苦みであるから此大なる嘔吐の苦悶に腦髓の力が集中して小なる苦悶の喘息を忘れたのである例へば右手に僅かな傷をしても痛みを感ずるが此時若し左手に大怪我をすれば右手の僅かなる痛は感じないものである故に吐根末でなくとも大なる苦痛を與ふれば喘息を忘れしむる事が出來るのである然し斯る道理に戻つた方法は常に効を奏するものでない否却て餘病を引起す事があるものである

抑々本病は根本たる腦髓の衰退より局部の神經纖維重に迷走神經の作用に誤りを來して起るものである而て概ね他の神經性疾病の症候を有するものであるサルチル

氏は本病と癲癇發作の交替するを見、オイレンブルグ氏は喘息の偏頭痛若くは狹心痛と交發するを檢し、ノルマン氏は喘息と精神病の交發したるを見たりといふ醫書にも一貫顯の患者は發作に際し數多の燭光に由りて室内を明るくすれば大に輕快し又香氣に由て發作を來す者は其物質を退け或は患者を他室に移せば輕快する事があると記してある予の治療したる一患者は唐木細工職であつたが桑若くはタガヤサンの木を取扱ふ時は必ず其晩より喘息の發作を來すと語れり此患者は僅二回の治療にて全快した

予の病理に由り腦髓より治療すれば確實に効を奏する事が出來るもので僅かに二三回の治療で全快する者もある且道理の上から論ずるも實に正當の手段である然るに從來の療法に於ては諸種の服藥、注射、大麻煙草等種々なる手段を取り一も確たる主義方針がない恰も暗中に物を探ると同じく唯患者を試驗の材料として居るに過ぎないのである斯る研究法では仲々完全の治療法を見出す事が出來ずして徒らに患者を苦めて居るばかりである

●歇私的里　本病は俗に血の道といふ婦人病であるが往々男子にもある近頃ズボンシェル氏は佛國の兵士内に甚しく蔓延したのを見たといふて居る本病は春機發動期に起る事が多いこは腦の作用に變化を起す時だからである又遺傳に由るもあり或は兩親が年寄てから結婚し若くは長き重病後に出來た兒に發する事があり又大人にても重病後に發する事があり、教育上の不適或は眞似をしても本病となることあり、又結婚病となつて來る事もあり、中毒若くは外科手術後に發する事もある、本病の發生に就て殊に關係のあるのは心配、苦勞、失望の如き精神上の劇動である劇しき恐愕も本病を發することがあり或は過房若くは色慾の抑壓よりも發する事がある

右の如く其原因は頗る多方面に亙つて居るが要するに是等の原因に由り腦が衰へ其作用に錯りを來すからである故に腦髓より治療するが正當で數年來の難症も唯一

二回の治療で全治する事さへある醫書に於ても精神療法に由りて効を奏する事多しと記してある即ち腦髓より治療する譯になるのであるが斯る單一なる事にては充分なる効果は得られない

愛氏内科全書には諸種の神經藥即ち阿魏、續草、麝香、葛私篤倔謨、ガルバヌム、臭素加里、砒石等の諸劑を用ひても決して著しき効を認めた事はない電氣療法は屢々有害なる事があるとしてある是等は皆療法が間違つて居るから効能がないのであつて元來有形の藥劑を以て無形なる腦髓の作用を適當に變更する事は出來ないものである

歇私的里性知覺脱失に於て皮膚の知覺機能を存する部分に金、銀、銅、の如き金屬板を載せる時は之と相對したる知覺脱失の部分に知覺機能を恢復し却て金屬板を以て覆ふてある部分の知覺を失ふ事があつて一八四九年ブルグ氏が始めて此現象を認め歇私的里患者は一定の金屬にのみ反應するから其金屬を内服させれば麻痺を癒すの力があるといふた然し金屬が麻痺に効のある譯ではなく異常の感覺に由り一時腦作用に變化を來した迄である既に芥子泥板或は象牙板でも同樣の現象を生ずる事があるのを見ても分る兎角從來の研究は唯目前の事のみに注目して腦作用に氣が附かないから誤を來すのである

昔時は陰核の手術を行ひ之を切り取て治療した事がある近頃フリードライヒ氏は再び陰核を腐らせて好結果を得たりと稱へ或は卵巣摘出術を施して治つた事があると報告した者もあるが何故斯樣な馬鹿げた手術をするのか少も其理由が分らない斯る手術が隅然効を奏したのは殊に陰部の手術なるを以て精神が此所に集中して病を忘れる事が出來たのである若し男性歇私的里患者なる時は陰核卵巣の如き物がないのを見ても明かに間違た治療法である事が分るのである醫書にも斯る手術は却て病勢を不良ならしむる事多しと書てある斯く身体を不具にせずとも道理に適したる療法を行へは安全確實に少しの害もなく治癒せしむる事が出來るのである予の療法に

於ては通常二週日以内に治し一週日以内に全治したのも澤山ある

●癲癇　本病の原因は甚だ多く從來の經驗に由れば遺傳するものあり或は諸種神經系病の家族中に發する事があり或は血族結婚は本病を發するとの說があり或は肋膜炎、肺炎、麻疹、猩紅疹、痘瘡等も屢々本病を誘發すといひ或は酒客若くは其子孫に發し或は眞似をして居る内に眞の癲癇となる事もあり或は頭部に怪我をしたり或は外科手術を施した爲に本病となる事があり或は梅毒に基く事もあり或は驚愕、憂愁、過度の喜悅若くは心身の過勞よりも發する事がある等種々樣々であるが要するに是等の原因に由て腦作用に錯りを來して起るのである故に腦を基礎として治療すべきは當然の事である

醫術に於ては所謂神經藥と稱するものを用ゆるのであるが少しも効がないのである醫書にも豫後は危險にして其治癒は寧ろ破格に屬すと書てある故に服藥は到底役に立たないのである

穿顱術といふて頭蓋骨に孔を穿つ所の手術があるが一向成蹟が善くない中には却て病の重くなるのがある抑々如何なる理由で斯る療法を思ひ附たかといふに昔し癲癇は惡魔が腦に這入て居るのだと思つて頭に孔を明け其所より惡魔を逐出せば治るだらうといふ樣な實に愚かなる考から始つたものだと云ふ事である然るに文明の社會に於ける醫書中にも尙此法が載てある予は何の意たるやを知に苦むのである初め考古學者が人骨に就て研究した時に頭蓋骨に孔のあるものが幾らもあつて其譯が分らなかつたが段々調査して以前盛に穿顱術を行つた結果であつた事が知れたのである

又椎骨動脈を結紮して治つたと報じた者もあるがペンシルバニヤ大學の外科術教授ホワイト氏は是等の外科手術は却て病勢を增惡ならしむる事を例證して居る予の治療したる十八歳の處女は頭痛眩暈等があつて長野縣の病院で診察を受けしに鼻茸が出來た爲だといふて鼻腔内の外科手術を行つたが夫より却て癲癇を引起し時々人

事不省となり三ヶ年間所々の治療を受けしも更に効なく終に予の所へ來て僅か一週間にて全快した近來は病の根本は多く鼻にある抔といふ間違た說を稱へ猥りに手術する者がある故に患者に於ても注意せねばならぬ

又婦人に在ては卵巢を切取る事もあり殊に卵巢の健全なる者でも之を行つた事があると醫書に明記してある何故斯る手術をするのか更に其理由が分らないのである既に前にも述べたる如く斯る手術が偶々効を奏するのは手術其物の効ではないのである否手術の爲め却て不良ならしむる事が多ひのである

故に予は一般に機能的疾病に對する外科的手術は根本的に誤で且禽獸的の療法であると論ずるのである

胃腸病　胃病に用ゆる藥は甚だ澤山あるが重なるものは苦味丁幾、蒂木髓越斯、次硝酸蒼鉛、稀鹽酸、コンズランゴ皮煎、百弗藥、ヂアスターゼ等である然し是等の藥品は皆胃其物の消化力を強くするのではなく唯一時的に液の補をして胃中に現在する食物の消化を助ける丈の事である即ち健胃劑ではなく消化劑である故に藥を飲だ時丈は少し腹が空く樣であるが服藥を廢すれば矢張元の如く消化が惡いのである例へば酒を飲で酒の氣が体內に存する間のみ醉た心持のして居るのと同じ事である又藥を永く連用すれば習慣となつて効能がない樣になり胃の働きも常に藥の力を藉りて居れば却て弱くなる

詰る所藥を飲で胃液の補をして自然に胃の働が善くなつて來るのを待つのである故に輕い胃病は治る事もある否藥を用ひずとも治るものもあるが慢性になると何程藥を飲でも効能がないのである抑々胃が伸縮の作用を營み又消化液の分泌するのも前に說明せし如く皆腦髓に於て主宰して居るのである故に腦髓を基礎として治療すれば胃の働も强くなり消化液の分泌も多くなつて慢性胃病でも治るのである即ち根本より治療するので所謂根治である

胃痛といふて常に胃の痛む人がある其時莫兒比涅の皮下注射或は頓服に由て局部

の神經を麻痺せしむる時は一時痛を忘れるが這は藥力に由て神經が麻痺して居る間のみの事で藥の氣が消散すれば再び痛み出す故に胃痛を治した譯ではなく一時痛を抑へた丈の應急手段である

此莫兒比涅を連用すれば恐るべき中毒症を起す故に毎日注射を要する場合には蒸溜水を加へて稀薄にし終には蒸溜水のみを注射しても一時は痛が止る然し患者が蒸溜水なる事を悟る時は更に効がない斯る時には眞の莫兒比涅を注射しても患者が蒸溜水だと思ふて居れば矢張痛は止らない斯く腦髓の作用に依て藥力の上にも變化を起して來るものである

莫兒比涅（モルヒネ）の慢性中毒症狀は連用するより生ずるので其徴候は消化不良、便秘、顏面蒼白、刺衝機過敏、記憶力減少、不眠、瞳孔の縮小若くは不同、陰萎等で尙連用久しき時は莫兒比涅ズフトと稱する一種の中毒症を起す事がある大量を用ゆれば急性中毒を來し速に深昏睡に陷り顏面蒼白となり次でチャノーゼとなり瞳孔非常に收縮し意識、運動、知覺、反射の四機共に消失し皮膚厥冷發汗し呼吸脈搏共に緩徐不正となり体温は著しく降下し兩便共に閉止し衰弱益々加わり心臟及び呼吸麻痺を起し瞳孔散大して終に死に至るものである

元來胃は直接に食物を取扱ふ所の機關なれば食物の攝生が必要なるは勿論の事であるが唯軟な物を食して居れば善いといふ譯には行かぬ餘り軟な物のみを食して居る時は却て胃の働が弱くなる又腦髓との關係に由て消化力に相違を起すものである例へば餅は不消化物であるが非常に餅の好な人であれば平常胃の働が弱くても能く消化する假令へ軟な物でも嫌なものは胸に支へて消化の惡いものである總て好物に對しては胃の消化力も强く胃液の分泌も亦多いものである此事は何人でも實驗して見れば直に了解する事が出來る尙嫌なものは腹痛若くは下痢を起し極嫌な物は假令へ消化し易き滋養物でも胃中に止まる事を許さずして之を嘔吐し却て害となる事がある今日は一般に斯る道理を知らずして牛乳は滋養物であるといふて何人にも勧め

て居るが嫌な人は腹痛若くは下痢抔を起すもので役に立たないのである概して胃病患者には牛乳は善くないものである

常に便秘して大便の通じが悪い人に下劑を投ずれば一時便通はあるが藥を廢すれば再び便秘する故に藥で便秘を治したのではなく一時通じを付た丈である抑々便秘は腸の蠕動運動が衰へたからで此運動を起す所の原動力は既に說明した通り腦髓に於て起るのである夫故に腦髓より治療して行けば蠕動運動が盛になつて每日快よく通じのある樣に治つて行くのである

又下痢するのは腸の蠕動運動が過敏になつたからである下痢を止るには重に阿片劑を用ひて居るが一時腸の神經を麻痺せしむる丈である然も或場合には一向其効のない事がある予は名古屋地方裁判所の判事某の下婢(十六)が蕎司を多食して腸加答兒となり一晝夜に三十回程も下痢し二人の醫師が一週間種々なる手段を盡して更に効なかりし患者を僅三回の治療で治した事があり又五十歲の婦人で流行寒冒より胃腸加答兒となり劇しく吐瀉して藥も更に飲めない患者を五回の治療で治した事がある詰り根本より治療して蠕動運動の過敏を靜むれば下痢が止るのである又三年間の不食病を治した事がある珍しき病氣であるから委しく其事實を記さん愛知縣丹羽郡岩倉町岩倉銀行支配人伊藤多賀三郎氏の長男伊藤弘(十七)は三ヶ年前より總ての食物は勿論湯水の如き物まで直に嘔吐して少しも飲食する事が出來ず炎暑の時節でも寒さを覺ゆる程にて屢々愛知病院の治療を受け明治三十七年八月頃には名古屋の好生館へ入院した事もあり何れの病院でも胃擴張との診斷であつたが更に効驗がなかつたので明治三十八年十一月十三日に本人の親籍なる同郡小口村の醫士前田愛郷氏同道で予の治療を受けに來て僅十一回の治療で全治した翌年三月に至り實父多賀三郎氏が態々禮に來ての話に本人は其後身体肥滿して頗る强壯となり五六里の道も平氣で步行する樣になり御蔭で命を拾ひたりとて非常に喜び名古屋の各新聞社へ此事實を話しに行くと言ふた斯の如く根本より治療すれば實に容易く治るものである

今日の生理的研究では動物が飲食を欠く時は其生命を保つ事が出來ないものとして居るが實際上の如き例がある予は此外に五十日間飲食せざる二十四歳の婦人を治療した事がある斯る事は第二人格的腦作用を以て説明すべきものと考へる然し此第二人格（セコンド、パーソナリチー）の事は現今讀者に取りて餘り不思議的に思へるから之を省く事にして他動物に於ても斯様な事實のある事を示さんに嘗て英國倫敦の博物館にて蜥牛を四ヶ年間陳列し置き後之を水にて濕したるに尚生存して居たといふ事があり又佛國の動物學者マルゲリエット氏は墓が何年間土中に於て生て居るやを試みん爲め石へ五寸四方位の穴を穿ち一疋の大なる墓を入れ板石にて蓋をなし之に目塗をして一八七一年一月十五日に之を土中に埋め夫より五ヶ年を經て一八七六年一月十五日に巴里の動物館へ墓を入れたる石を運び數名學者の面前で之を開きたるに墓は尚生息して居たといふ事がある故に人類でも或場合には飲食せずして生存し居る事が出來るのである

此頃　有栖川若宮栽仁親王殿下は盲腸炎に罹らせられ數多有名の醫士が拜診し外科手術までも行ひしが終に其効なくして薨去遊ばされたるは實に御悼ましき次第である抑々盲腸は上行結腸の底部に當つて居る所であつて通常物体は地球の引力に由り下降するものなるに此所にては腸の内容物が上行する所である故に腸の蠕動運動が衰へる時には此底部に滯り勝となる斯様な譯で糞便の推積より本病を發する事が最も多いのである

本病の症候は便秘、劇痛、發熱、吃逆、嘔吐等であつて之に對し醫術では如何なる處置を施すかと云ふに先づ便秘に向ては水若くは油を用ひて灌腸するのであるが直腸若くは横行結腸に達する位なもので無論確たる効を奏する事は出來ないのである又蓖麻子油、甘汞、葯刺巴等の下劑を内服せしむる事もあるが却

て炎症を增劇するの恐があるもので獨國アイヒホルスト氏の如きは之を排斥して居る故に本病の便秘には如何なる處置を施すべきかと云ふ事は頗る屢々提出せらるゝ所の疑問で醫士の大に惑ふて居る所である

次に疼痛に向つては大量の阿片(〇、〇三)を二時間毎に服用せしむるのである

然るに阿片は却て大便を秘結せしむる所の作用をなすものである故に大便の通じを附る爲に下劑を用ゆれば疼痛を增す事になり又疼痛の方を止めんとして阿片を與ふれば便秘せしむる事になる

斯く一の症候に對して藥を與ふれば他の症候を重くする樣になつて來るので今日の內科醫術に於ては本病を治療するの確たる手段方法がないのである故に外科手術を施して見るのであるが往々夫が爲めに死亡する者があつて實に危險である

予の發見したる學理と療法とに據れば些の危害なくして諸種の症候を同時に治療する事が出來るのである何となれば炎症、便秘、疼痛、發熱、吃逆、嘔吐等は皆腦に於て支配して居るものであるから腦を基礎として治療すれば何れの症候も同時に容易く治療し得らるゝからである

今日の人は醫術を最も進步したものと迷信して居るから徒らに病の爲に苦められ或は生命までも失ふ樣な事になるのである若し予の發見したる學理が社會に廣まつて居つたならば殿下も容易に全快せられたであらうと考へる實に遺憾の至である殿下薨去の事は本書印刷中の出來事であつたから世人に警告する爲め特に後より茲に追加したのである

●脚氣　本病の原因に就ては未だ醫術上に定說がない其中で米食說を取る人が最も多いのである即ち脚氣は貯藏法惡き米の食用に由來する中毒症だといふのである山極博士竹中學士の如きは此說を主張して居る而て之が動物試驗として鷄に白米を與へて置たら本病類似の症候を起したと言ふて居るが人類は白米を煮て飯となし然

る後之を食ふので白米を其儘食用に供しては居らぬ然るに鶏には白米を其儘與へた試驗であるから既に其方法が適切でない

元來此試驗は養鶏上の經驗もなく突然鶏を伴れ來り俄に白米のみを與へて試みたものに相違ない此飼料を變更するといふ事は養鶏上大なる注意を要するもので殊に夏期に於て飼料を變ずれば大抵失敗するものである且是迄放し飼にしてあつたものを急に籠伏にすれば運動不足等より病氣を起し易いものである尚鶏は圭角ある小石を食ふ此石は胃中に在て齒の代用をするのである蓋し鶏は穀類を丸呑にするから斯る必要があるので青草も亦缺くべからざるものである然るに籠伏若くは狹き所に閉込めて唯白米と水丈を與へて置くのは無理な飼養法である又日本の養鶏家は雛を飼育するに概ね小米を用ひて居る己を得ざる時は高價なる白米の小米を用ゆる事さへある然も熟練家は完全に生育せしむるのである又搗米屋には大概數羽の鶏があつて重に米を食して居る尚又白米は脂肪及び石灰分が少いから鶏に適當な飼料ではない

斯る事柄を探究せずして粗漏なる試驗に由り脚氣の病原を定めんと欲するは實に迂遠であると考へる

又白米六分に麥四分を混じて食すれば本病の豫防に効ある事は何人も稱へて居る所の事實である我陸海軍に於ても之を勵行せし以來殆んど脚氣患者の跡を絶つに至つたといふ事である若し米の中に毒素があるとすれば麥を混ても毒の消る筈がない又夏向に限て脚氣が特に多い筈もない譯である故に米中有毒素說は不確實であると思ふのである

又明治三十六年五月グリスチャナに開會したる諸威學術協會の大會に於てユーオエルマーン博士は脚氣病調査の結果を報告し「脚氣は神經炎の東洋的命名にして腐敗せる野菜食物及び腐敗せる肉食に歸すべきものである而て野菜的症候は亞細亞的脚氣と密接なる關係を有し且通常腐敗せる米食をなすに基因し動物的症候は特に歐羅巴の航海中に發する脚氣と密接し且主として腐敗せる肉食をなすに基因す」と述

て居る

此說は米中有毒素說よりも眞に近きものであるが未だ盡さゞる所があると思ふ其故は以前我軍隊で麥を用ひざりし時でも三食共焚立の飯と副食物とを用ひて居たが脚氣患者は澤山あつて麥を混ずる樣になつてから著しく患者が減少して殆んどない位になり又一般社會の人でも衛生に注意して腐敗した食物抔は食べない樣になつたが矢張患者がある故に既に腐敗したる食物を用ひたから本病が起るとは言へないのである

故に予は次の如く考へる本病は食物が未だ消化せざる前に胃中に於て腐敗的に傾き之が爲め腦作用に影響して麻痺を起したのである之を實際に就て說明すれば世間でも米の飯は腹持が善いと云て居る通り米飯は比較的消化が遲く且暑氣に向ふ時節であるから胃の中で未だ消化しない內に腐敗的に傾き終に腦髓に影響して其作用を變じ水腫や麻痺を起すのである而て麥を混ずる事に由り本病の豫防上に効があるのは世間で麥飯は早く腹が空くと稱へて居る通り消化を速かならしめて腐敗の時期に至らしめないからである

先年東京府の技師八木長恭氏は麥飯中に澱粉を糖化する所のヂアスターゼを產出する細菌が含まれて居る事を發見し挽割麥百粒の中に此細菌を含むものが四十五粒から八十五粒位あつたと云ふ事である即ち麥を混合する時は消化を速かならしむるの理を實際に證明し予の說を確むるの便宜を與へるのである又歐羅巴の航海中に發する脚氣は重に鑛諧食物に基くのである蓋し鑛諧は空氣の接觸を絕ち强制的に腐敗を防で置くものなれば一旦鑛の蓋を明ける時は極めて早く腐敗するものである

脚氣に用ゆる藥劑は概ね胃病に用ゆるもの即ち消化劑である又心臟の衰弱及び水腫に對しては實芰多利斯、麻痺に對しては硝酸斯篤里規尼涅の注射及び電氣を用ゆる等種々あるが何れも對症療法にして根治策ではない故に實際に於ても効のない事は世人の能く知つて居る所である

既に説明したる如く腦髓の力が衰へ抵抗力が薄弱になる時には病に犯され易きもので本病に就ても同様である名古屋市の某商店の番頭は永年勤續してありしが是迄一回も脚氣に罹つた事はなかつた然るに徴兵適齢となり愈々其年に入營する事に極り甚だ此事を心痛して居つたが其年始めて脚氣病となつたといふ此事は予が商店の主人より直接に聞た話である又予の治療したる二十歳の婦人は藝者屋に奉公をして毎夜二時三時頃まで寢ずに居り時に徹夜抔する事もあつて非常に腦を弱らし終に脚氣を引起したので睡眠を適度ならしめて治療を施し十日餘りにて快癒するに至つた斯く腦髓に關係して居るものであるから腦髓より治療すれば容易く治るのである

心臓病　本病には重に實芟多利斯（ザキタリス）を用ゆるのである此藥は少量を内服すれば迷走神經を刺戟するのと心動作の強盛になるのとに由りて血の壓力が亢進して來るが唯一時的に藥の力で神經を刺戟して居る間のみの事で心臓の働が善くなつたのではない且大量を用ゆるか或は少量にても之を連用する時は中毒を起し脈搏頻數となり且心臓筋の衰弱に由りて血の壓力降り加ふるに嘔氣、食慾減退等の消化器病症と頭痛、眩暈、眼花閃發等腦の症狀とを併發し尚大量を與ふれば脈搏益々頻數不正となり血壓非常に下降し心臓麻痺を起して死するに至るものである心臓の病氣を治そうとする藥でありながら其中毒的症候は却て心臓を惡くするのである

假令へ少量でも蓄積作用で中毒症を起して來るから五六日以上續け永く連用する事は出來ず暫らく服用を止て居らなければならぬ斯の如く飯の上の蠅を追ふ樣な事をして居る内に病は益々重くなつて來る諺り藥の力で一時病勢を抑へて居つて自然に治つて來るのを待つのであるが實際に於ては中々治らないもので醫書に於ても豫後は多く不良としてある

玆にボーニス教授の實驗を引用して脈搏の變化（心臓の鼓動に關す）を示さんに教授が一患者に催眠術を施したる時は一分時に九十六の脈搏であつたが催眠中に九八、四に增加した此時減少の暗示を與へしに九二、四に下り後一〇〇、二に上りた

る時更に加速の暗示を與へたるに一一五、五に上れりといふ斯く暗示に由り脈搏の遲速を來した事實が檢脈器を以て摸寫せられ同氏の著者に載てある

英國の某醫師は心臟病の患者を診察する時には自身の僧帽狀瓣の不適當を感じ其動悸に困んだ事があるドクトル、ウィンスロー氏は此事に關し特別の機關に病的觀念を集中すれば組織の變化を起すものであるといふて居る

尙前に說明せし如く物に驚けば動悸が高くなる如く腦髓に於て之を支配し腦作用の衰退錯誤から心臟の働きに變化を來すものなれば根本たる腦髓より治療すれば少しの危害もなく安全に根治する事が出來べき道理であり實際に於ても亦治す事が出來るのである名古屋市役所に勤て居る人で一年半も前から心臟病に罹り顏色が眞靑で脚部に水腫があり僅かな道の步行にも困難を感ずる患者を治療したが二週日で殆んど全快し又商業上の心勞から動悸高ぶり脈搏も不正となつた患者を治療したが此者は病の初期で發病後三ヶ月程であつたゆへ一週間にて全治した此人は岐阜縣土岐郡駄知村の者で歸國後も禮狀を送つて來た

糖尿病　本病に對し東京醫科大學では亞片末を與へて居る樣であるが亞片末は麻醉、鎭痛、瀉止等の作用をなすものである然るに本病患者は多く便秘するものであるから尙大便を秘結せしむる樣な藥劑を投ずるは適當でないと考へる

其他撒里失爾酸、安知必林、安息香酸等の藥劑が糖の醱酵を抑制するといふて用ひて居るが普に効なきのみならず却て害をなす事ありとは醫家中既に之を稱へて居る者がある

故に現今は重に食餌療生法を執り澱粉質の多量を含有する米食を禁じ專ら肉食のみを執る樣にし以て糖の出來るのを止め樣として居るがこは大なる誤であると言わねばならぬ何となれば蛋白質も亦抱水炭素物と同じく糖化するもので動物試驗に由るも糖を多食させても血の中の糖分比例を增加するものでないからである但し健康体の血液中には糖分を含有する事〇、一五%の定量であるが本病患者に在ては〇、二

乃至〇、四五%に增加するもので其糖分は泡水炭素、クリーコーゲン、蛋白質及び食物中の蛋白質より醸成せられ身体中何れの所でも糖原質を糖に變化するといふ事になつて居る

醫書にも俄かに單純の動物食に移らしむる時は糖尿性昏睡に陷るの危險があるといふて居る假令へ肉食に依り糖の減ずる事あるも一時の姑息的手段である尙甚だ矛盾する事はソーヤー氏が日々千瓦乃至千五百瓦の馬鈴薯を本病患者に與ふれば有効なりとの說を稱へた事である馬鈴薯は何人も知る如く澱粉質である斯の如く現今の醫術に於ては確乎たる說がないのである

尙又肉食を主とする歐米人殊に富豪にして美食する人に本病患者が澤山あり米麥の如き澱粉質を多食する日本人が特に本病に罹る者が多いといふ譯でもない故に肉類の食用が本病を治癒すべき理由はないのである醫書にも豫後は不良にして永久の治癒は得て望むべからずとしてある

從來の經驗に依れば本病の原因は遺傳に重要なる關係を有するといふ事になつて居る這は獨り本病のみにあらず諸疾病にも多く遺傳的傾向あるは當然の事である蓋し前代の一部を以て子孫を造り出すものであるからである然し男女の二体よりして新生体を生ずるものなれば彼是の關係によりて遺傳的症候の消滅する事があるものである（遺傳に關する學說は他日更に述ぶる所あるべし）又神經衰弱、歇私的里、舞踏病、癲癇若くは精神病の遺傳素因を有する家族に本病を發する事が屢々ある

又往々神經系病から直に本病を續發することがある解剖上に於ても腦の底面の第四室に腫瘍、出血、軟化若くは硬化を認むる事がありクラウド、ベルナルト氏の有名なる試驗に據るも第四室底面の迷走神經基根部に近き一定點に外傷を與ふる時は尿中に糖分を混ずるものである

精神の劇烈なる衝動も本病を誘發するものであつてスフォン、フレーリヒス氏は數多の經驗中に於て屢々投機の商業に失敗して本病を發する者があるといひ尙又儲か

る相場の時には糖分の排出が少なく損をする時には病が重くなり糖分の排出が多くなるとの事實を認めたりといふ即ち相場の高低により本病に消長を來すのであつて腦髓を苦める時は本病を發し或は病勢を重くする事が分るのである

是等の實驗に徴するも腦を基礎として治療すべきものであるといふ予の發見した原則の合理的なる事が分るだらうと考へる實際に於ても予は本病患者を治療して効果を認めて居るのである一人は以前愛知縣の郡長をして居た人で十五年間の糖尿患者である既に東京醫科大學其他所々の治療に充分手を盡しても更に効がなかつた後で身体は甚しく衰弱し十數町の歩行にも困難を感じて居たのであるが約六週間の治療で尿量糖分も減じ其他身体の各部も大に良好となつた他の一人は八年間の糖尿病で以前は二十貫目以上も体量があつたが予の治療を受に來た時は十三貫目程になつて居り半道程の歩行にも困難を訴へて居たが一ヶ月餘りの治療で尿量も減じ身体も強くなり名古屋より一里半程もある熱田まで往復が出來る程になつた斯る永年の慢性症でさへ効驗が現れるのであれば早期に於て予の發見したる學理と療法とに來きて治療すれば疑もなく全快する事が出來るのである

●腹水病

本病の治療法としては劇しき下劑、利尿劑、發汗劑を用ゆるのであるが所謂對症療法にして唯腹部に溜りたる水を排出せしむる丈の事である隨て出せば隨て溜り少しも根本を治療する所の法ではない恰も河水の源を止めずして下流の水を酌取るに等しく到底盡くるの期なく其内に段々病は重くなつて來るのである又穿刺術もいふて腹部に孔を穿ち此所より水を取る所の手術もあるが唯一時の應急手段にして利尿劑杯を用ひ排出を謀るも詰り同じ譯である故に水の溜らない樣に治療するのではなく唯溜りたる水を出すといふに過ぎない斯る治療法に由り治癒せざるべきは何人にも其理由が分るだらうと考へる眞に本病を治療せんには水の溜つて來ない樣にせねばならぬのである

本病は血の壓力が著しく亢進するか或は血管壁の滲透性が增進するかに由て腹腔

内に液体が溜るのであつて其他身体の各部にも浮腫を伴ふ事があり而て肝臓病の一症候となつて來る事もあり或は腹膜炎若くは心臓病等より來す事があり或は身体臓器甚しく体液を失ひ血管の蛋白質減少する時即ちブライト氏病、頑固の下痢、經久の化膿、反復せる劇甚の出血、腸窒扶斯、虎列刺、赤痢、壞血病、血斑病、癌腫、間歇熱、梅毒に續發する悪液等にも之を見る事があるとしてある

斯く諸方面より來す事あるも其根本的病根は腦髓に在るものなれば腦髓より治療すれば安全にして他の症候までも良好となるのである予は二十年間に亘れる慢性の腹水患者を取扱つた事がある岐阜縣稻葉郡鵜沼村山田ヒサといふ四十二歳の婦人で二十年前夫に死別れ衞來舅の傍で二人の小兒を養育し悲哀も心勞もあり終に腹水病となつて初めは三ヶ年毎に腹部の水を取つて居たが段々水の溜り方が早くなり予の治療を受けに來たのは明治三十七年の十一月であつたが此時は既に一ヶ月毎に水を取らねばならぬ程に病勢が進んで居つた

予は引續き十五日間治療をしたが殆んど増水の徴もなく其他身体各部の工合も善くなつて來たので患者は予に向て最早全快したのかと問ふた予は之に答へて何分二十年にもなる慢性症だから是まで腹一杯に水の溜つた期限即ち約一ヶ月間の治療をして其結果を見なければならぬと言ふたが患者の方では全治しても尚引張て置くものと邪推して己を得ざる用事が出來たと言て歸國してしまつた

果して全治しては居らなかつたので翌年の二月に再び私の所へ來た其時の話に水の溜り方も餘程遲くなり郷里に於て前から治療を受て居た醫士に一回水を取て貰つたが排出物は著しく清淨となり以前より病は輕くなつて居るといふたそうである而して前回の如く治療を加へたが割合に成蹟が擧らず又食慾はあつても嘔吐を催ふして食する事が出來ないといふ如何にも不審であるから段々問質した所が他の醫士にも掛つて服藥をして居るといふ事を答へた多分實芰多利斯を用ひて居つて其中毒的症候を起したのであらうと考へる依て予は患者に向て二十年來の長病で是まで充分

藥を飲で居るから藥の効がない事は大抵分て居そうなものである然るに尙藥を用ひて居る樣では予が治療しても効がないと言ふて色々に論し終に藥を止めさせた

然し斯る事柄の爲め時日を經過して居る間に腹部は益々膨脹して既に苦痛を感じ夜間も安眠が出來ない程になつて來たので應急手段として一度水を取らねばならぬと言ふてやつたが他の腎士は苦くても成丈堪へて居れといふたそうでドーしても予の說を用ひない依て予の指圖に從わねば治療するの甲斐がないといふて終に斷つたが其後三四ヶ月程で多分命を失つた事と思つて居る

此患者が最初に來た時には能く予の指圖に從つて治療を受たから其効が着々と現われたが二度目の時には親戚中に予の療法を疑ふ者があつて他の治療をも受けさせ夫がため却て本人の不幸を來す事に立至つたのである

●腎臟炎　本病の療法は熱浴に入れ或は鹽酸必魯加兒必涅（ヒロカルピン）の注射或は純精酒石、實芟多利斯（ザキタリス）等を內服せしむるので腹水病に用ゆる藥と略同一である實芟多利斯の害は既に心臟病の所で述て置た鹽酸必魯加兒必涅は嘔吐、下痢若くは心臟衰弱等の中毒症狀を起すものである要するに是等藥劑の目的は水分を汗として分泌せしむるか或は小便の量を多くして浮腫を減少せしめようとするのであるが斯る狀況を起すのは唯藥の成分が体內に存在して居る間丈の事で腎臟の働きを善くした譯ではない故に一時浮腫は減する事あるも藥を廢すれば小便の量も減し再び腫れて來る又發汗せしむる事も毎日行へば身体が衰弱し且中毒を起して來る即ち一時凌ぎであつて本病を治すといふ方法ではない實際に於ても餘り効能がないのである

腎臟炎は一名ブライト氏病といふて從來の經驗に依れば流行性傳染病後に發し或は藥の中毒から起す事もあり其他寒冒、梅毒、外傷、氣候、酒精の暴飲等も之を引起す事があるとしてあり尿中には蛋白質を混じ顏面手足其他にも浮腫を來すものである

大澤隣學博士は本病に就て「腎臟の病氣の爲に尿水が減た之が炎症の爲であれば

發汗劑を用ひて腎を休めねばならぬ然るに心理の作用を以て唯尿量を增せばよいと心得て腎の働を高めたならば如何であらう」と言われた勿論唯尿量を增す丈では不完全であると同時に小便となつて排泄すべきものを劇劑の力に由り汗として分泌せしむるのは無理な方法であるのみならず藥の中毒があつて永く繼續する事が出來ず且身体を疲勞せしむるものである殊に必魯加兒必涅の如き發汗劑は心臟虛脫を起すの恐があるから之を用ゆるには心臟の强壯なるを要するのである博士の言に依れば本病に對して發汗劑のみを用ゆる事の樣にも見へるが實際今日の療法に於ては劇しき利尿劑も與へて居るのである既に說明した通り腎臟の働き、血液の循環等も腦髓に於て支配して居り火傷の如きも容易く治るものなれば腦髓を基礎として治療すれば排尿及び炎症も共に治す事が出來るのである予は實際に於ても本病患者を治療して好結果を示して居る患者は三十歲の婦人で一ヶ年前より本病に罹り顏面及び脚部等にも浮腫を來し尿には蛋白質を混じて居り是迄諸々の病院にて治療を受け到底治癒の見込はないと言われて居たのである予の所へ來たのは明治三十八年の十二月で此月に五回治療したが既に尿量を增し蛋白質も減じ氣力も大に恢復した翌年の一月中には二回治療し二月中は全く休み三月には八回治療した

斯く四ヶ月間に互り僅十五回の治療を受くるが如く甚だ不規則であつたのは此婦人の夫が陸軍の軍屬で陸軍豫備病院へ入院して居るのを此婦人が自身の病を押して看護して居たからで自由に外出も出來なかつたのである斯樣に攝生も出來ず治療も怠り勝ちであつたにも拘らず其成蹟は善かつたのである此婦人は看護婦の學科を修めて居つたので予の學理を能く了解し安心して治療を受けたからであらうと思ふ

●瘰癧　一に頸腺病ともいひ頸筋に數多のグリ々々が出來るのである其療法には古來醫術に於て苦心したのであるが今だに適當の治療法がない而て現今では身体を强壯ならしむるの目的を以て肝油鐵劑抔を用ゆる者がある勿論本病は虛弱なる人に多しと雖も中には身体適當に發育し單に腦の充血して本病を發するのもある

故に强壯劑を用ひたからとて之を治癒せしむる事は出來ない實際に於ても確たる効能は見へないのである或は頭部の皮疾、耳中の潰瘍、中耳炎、鼻腔の腫瘍、扁桃腺炎、咽頭の疾患等より其毒を吸收して頸部の腺内に溜りたる微菌から起るものだといふて結麗阿曹篤(殺菌劑)を用ゆる者もあるが前記諸症の前提なくして直に本病を發する者が澤山にあり又所患の器質内に微菌の存在するは寧ろ稀なりといふ醫書にも腫脹せる淋巴腺を以て悉く結核感染の所爲に歸すべからずとしてある實際に於ても殺菌劑杯は些の効を奏しないのである其他沃度砒石等を用ゆるも効なき事は世人の熟知して居る所である又外科手段に由り患腺を摘出する所の法もあるが後から續々と出來るもので一向役に立たないのである即ち何れも根本的の治療法ではないのである

本病に就ての先天的原因は兩親が高年に達し或は肺病、癌腫、梅毒等の如き病氣で衰弱するか或は厄難の爲め不幸に陷るか或は近親相婚する者の小兒に本病を發する事が多く又父親が飲酒家なる時も其小兒が腺病に罹ると稱ふる醫師もある後天性のものは營養の不適即ち生母の乳汁若くは善良なる牛乳を得る事能わざりし者其他適當なる食物を欠き衛生上不良なる場合或は學科重く精神的修行劇しく爲に体育殊に日々新鮮なる大氣中に於ける運動を忽にする時も亦發する事があると醫書に述てある

要するに上記の原因から腦作用の衰退錯誤を來して淋巴腺の腫脹を起して來たのであつて其徴菌を認むる事あるは寧ろ結果と見るが至當である但し徴菌新生の學理は第三章肺結核新病理中に説明する事にする旨醫院杯に於ては腺病の多發せし小兒を日々新鮮なる空氣中に於て散歩せしむる所の教育法を施して本病の減少した事があり又は海水浴にて治する事もある醫書に於ても精神の過勞は殊に禁ぜざるべからずと述てある諸り腦髓が健全になれば治癒せらるべきものである

今より約二百五十年前愛爾蘭士の人ヴァンレンタイン、グレートレーキ（一六二八

年生）なる者一種の假定力に依り瘰癧を治療し英國に於て大評判となつた事があつて其當時の有名な科學者ロバート、ボーイル及び神學者アール、キュドオルスといふ人等は此療法の有効なる事を證明したといふ事が英國百科全書に掲げてある即ち腦作用を應用したる一種の治療法である

予の本病治驗を示せば名古屋市西魚町十二歳の女子は數箇の瘰癧ありしが十五回にて全治し又同市西萬町井上某（十八年）は上せ性にて顏面常に赤く約一ヶ年前より數箇の瘰癧を生し居たりしが三週間にて全快し又同市仲の町森某（二十四年）といふ女子は數箇を生し一錢銅貨大のものもあり尙氣分塞ぎ頭痛劇しく肩凝り脚部の麻痺等もありしが僅々十回の治療にて總ての症候とも全治した

虎列刺病　一八八四年獨國コッポ氏が虎列刺病菌コンマバチルレンを發見せし以來此病菌に由て傳染するものであるといふ事になつて多くの研究者は專ら殺菌を目的として諸種の殺菌劑を與へて見た勿論或物質は甚だ稀薄でも能くコンマバチルレンを撲殺するが實際に用ひては効がないと醫書にも書てある例へばフォン、エルメンゲム氏が六百倍の石炭酸でも能く虎列刺菌の純粹培養を撲殺するの力があるといふたのでアイヒホルスト氏は廣く之を應用し往々多量に投與したが更に効がなかつたといふて居る其他收斂劑、下痢、興奮劑、發汗法、水若くは食鹽水の皮下注射或は直腸注入等も効がないといふ事になつて居る醫書にも今日尙特効藥はなく豫後は危險なりとしてある又ブリーゲル、北里、パイフェル、ワッセルマン、イルゼーフ其他多くの人々は血清療法に就て研究したが是亦確たる効を奏しないのである故に他の方面より研究して有効なる療法を發見せねばならぬのである

當てコッポ氏が虎列刺菌を發見し之が病原であるといふた時にミュンヘン大學の教授をして居るペッテンコーフェルと其助手のエンメリッヒといふ二人のドクトルが之に反對して種々劇論の末終に此二人は虎列刺菌の純粹培養を飲だ事があるが二人とも虎列刺病にはならなかつたといふ事がある

又ルムベル氏及びカリンスキー氏は虎列刺流行地に住する全く健康なる人の糞便中にも虎列刺菌を發見したりといふて居り其他虎列刺患者の吐瀉物、血液、尿或は汗液を動物の胃腸或は血管内に送り若くは皮下に注射しても感染しない場合が澤山ある醫書にも本病患者に接近して居る醫士や看護婦が特に餘人よりも多く感染するといふ事實もなく經驗に徴するに傳染の機會に相遇するも感染しない者が澤山ある故に人身は虎列刺に對して永久若くは一時の免疫性があると述て居る

即ち前に說明せし如く有形無形の刺戟に對する腦の抵抗力が弱い時には感染する事になるのである例へば漆に觸れても直に痒くなつて發疹する人もあれば一向感じない人もある又嫌な食物は假令新鮮な品でも中毒的症候を起したり唯見たばかりでも嘔吐を催ふす事さへあるのと同じ道理である醫書にも本病に對する恐怖心は頗る不良の影響を來すとしてある腦に於て恐怖の念が起れば著しく抵抗力を減ずるからである故に之と反對に意思が强ければ傳染を防ぐ事も出來るのである虎列刺流行の際は精神沈鬱、心悸亢進、腹腔内の雷鳴及び腓腸痙攣抔を起す者が隨分ある是等は既に幾分か其刺戟に敗けたのである（尙腦の抵抗力に就て說明せし際に揭げたる虎列刺の例を參照せよ）

一八六五年伊太利の都ネープルスに於て虎列刺病が非常に流行した時人民は大に恐怖して日々市外へ逃げ出す者が澤山にあつた其時の國王はエマニュエル陛下といふ頗る勇氣のあつた方で虎列刺病院を巡視し病床の傍に立て一々患者を慰め就中最も重症で醫士等も到底助からぬとして居た一患者の枕邊に立て國王自身に患者の手を握り「氣を慥にして本復する樣心掛けよ」と宣ひて還御になつたがさしも重症の患者は此時より快方に向て此事が知れ渡り俄かに虎列刺患者の數が著しく減少したといふ事がある即ち國王の慰問で腦の抵抗力を增加し病勢に打勝て健康的作用を營む樣になつたのである

既に說明せし如く排泄作用は腦髓に於て支配するものなれば予の發見したる原則

に由り腦髓を基礎として治療し其抵抗力を強め食道及び胃腑の働を善して嘔吐を止め、腎臟、膀胱及び尿道の作用を適當にして小便の通じを付け、腸の蠕動運動を緩かにして下痢を止むれば確實に本病を治癒せしむる事が出來べき道理である書にも斷つて置た通り急性傳染病と確定したものは取扱ふ事が出來ないから治驗は示さないが予の學理に於ては治療の手段が豫め分つて居るのである但し患者には數日間（自然に食慾の生ずるまで）全く飲食を絶たしめて置く事が必要である本病と症候の類似せる胃腸加答兒の治驗は胃腸病の部に掲げて置た

予は黴菌は新生する事があるといふ意見で此事は肺病の部に於て述べる事にするが健康体の糞便中にも虎列刺菌の存在するものなれば假令へ病菌があつても病的症候を起さず身体が健全であれば善いのである故に唯殺菌にのみ着目して研究しては到底本病を治す事は出來まいと考へる本病に關して予の述べたる學理は赤痢、腸窒扶斯にも亦應用する事が出來るのである、

ブルク氏は石炭及び銅を採掘する鑛夫が本病に罹らなかつたといふて本病患者に銅を用ひた事があり又一八九二年ハンブルグで虎列刺の大流行があつた時に偶々麥酒醸造所に患者がなかつたからと云ふて麥酒が本病の藥になるだろうとか或は卷煙草製造者は本病に罹る事が少いから煙草が有効であろう抔と稱ふる者もあるが實に淺薄な考である既に屢々述べたるが如く腦髓が刺戟に敗けて病的作用を起して居るのだから腦隨より治療するに非ざれば確實に治す事は出來ないのである

此章は重なる數種の疾病に就き第一章の原則を應用して説明したのである讀者は能く此學理を腦裡に收めて他疾病を推究せば其病理自から明瞭なるに至らん

完全治療

以上述べたる原則を實際に應用するには如何なる方法に賴るが道理に適するであろうかといふ事を考究するに方り予は完全治療法なるものゝ定義を作つたのである

元來治療法には物質を元とするもの即ち生理的療法と精神を元とするもの即ち心理的療法との此二つより外にないもので別の言葉を以て言へば有形的の療法と無形的の療法との二つである生理的即ち有形的療法に屬するものは醫術、摩擦術、鍼灸等である電氣療法、食餌療法、空氣、日光、温浴、冷浴、運動等も此内に加ふべきものである心理的即ち無形的療法に屬するものは催眠術、加持、祈禱、咀呪等である但し降神術は催眠術の内に含まるべきものである

之を哲理上より考ふれば生理的療法は唯物論に當り心理的療法は唯心論になるのである元來物質といひ心性といふは恰も物に裏表があるのと同じ事で哲學上では之を相對といふて居る即ち物に對しての心、心に對しての物である一枚の紙には裏と表とがある裏ばかりでは一枚の紙とはならず表ばかりでも一枚の紙とはならぬ裏と表とがあつて始めて完全なる一枚の紙となる人間には心も身体もある心ばかりでは一人の人間にはならず身体ばかりでも一人の人間とはならぬ心と身体とが合して始めて完全なる一人の人間となるのである

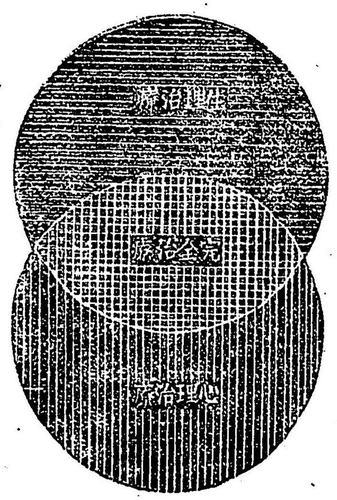
故に身体の方面からのみ治療して諸病を治そうとする所の生理的治療も人間の半分丈を見たものであるから一方に偏したものである即ち完全な療法ではない又心の方面からのみ治療して諸病を治そうとする所の心理的治療も人間の半分丈を見たものであるから一方に偏したものである即ち完全な療法ではない

然るに哲學上に於て絶對の眞理は相對の中にあるといふ事になつて居る故に此學理よりして完全の治療法なるものは生理心理の外には決してない必ず其中に在て然も一方に偏らない所のものでなければならぬ斯の如きものは生理心理の療法を調和したものでなければならぬ事に歸着する譯になつて來る依て予は完全治療法を次の如く定義したのである「完全治療法は心理を經とし生理を緯としたるもの即ち心理と生理とを調和したるものである」と此定義も亦萬世不易であると予は斷言するのである勿論人智の程度と病症とに由り多少の斟酌を要

するのである

今第七圖を以て完全治療法の意義を示せば堅に平行線を施したる圓形を心理治療とし横に平行線を施したる圓形を生理治療と假定し此兩圓形を交叉せしむる時は中央に於て竪横共に平行線のある部分が出來る即ち此交叉したる部分が完全治療法になるのである故に完全治療法中には生理心理の各療法の幾分を共に含有して居るのである

第七圖



斯く完全治療法の定義が明になつたに就ては前に述べたる原則を應用するに方り予は心理生理の諸療法中より其粹を取り其誤を正し之を改良して出來得る丈簡單に然も最も有効に且無害ならしむる事を謀つたのである要するに完全治療法を目的として改良したのである而て現今予の主として採用しつゝある所の方法は醒覺催眠兩時に於ける心理療法と予の新に工夫せし健腦、健胃、强肺其他身体各部の機能を善良ならしむる所の生理的手技とを調和し尚其病症と各人の身体知識及び生活の程度等に應じて適當なる攝生法を採らしめて居るのである之に依て予は多くの内科的難病者を救濟して居るのであるが其詳細は到底紙上に於て説明する事能はざるを遺憾に思ふのである

予の療法に於ては完全治療を目的として居る譯であるから毫も身体に害を與ふる樣な事はなく無病の人が治療を受ければ益々健康となるもので繁劇なる事務に從事する人若くは常に腦を多く使用する人は別に病氣はなくとも時々此療法に依り腦を

健全ならしめ置けば大に自身の爲になる又疾病を未發に防ぐ事即ち豫防するといふ事も出來るのである其他一般に腦作用を改善し得るものなれば殆ど人間萬般の事柄に應用する事が出來るのであつて例へば教育上に於ける或る科目に對する腦髓の力を發達せしむれば特に其學科の上達を期し得らるゝが如く吾人の生活上に於て最も必要なる療法である然し現今の社會は概ね物質的の智識のみなるを以て其眞價が能く世人に分らないのであるが嶄新有益なる此學理を早く應用すれば大なる利益を受ける事が出來るのである

然れども現今予の採用しつゝある所の方法が必しも完全であるとは言へないのである何となれば未だ設備が不完全で理想通りの事さへ實行が出來ないのである況んや今後に至り心理生理の調和上如何なる名案を發見する人があるか分らないのである故に予の療法に完全治療法の名義を附する事は出來ないのである

夫に就て近頃露國のザメンホフといふドクトルが國際語エスペラントを發明した此語は最初に文法を作り各國語の内より其粹を取り出來得る丈け簡單にしたものであるが其効用は宏大で各國に於て歡迎せられて居るのである予の療法も初めに原理原則を定め各療法中より其粹を取り然も其効用を大ならしめた點が酷似して居るのと他の一つは露國に於て世界的の有益なる學術上の新發見があつたのに我日本國に於ては未だ夫程の發見がなくては實に恥かしき次第であると思ふ所から責ては予の發見したる新學理を以て世界人類の病苦を救濟し全世界の人々に無限の利益を與へたいとの考から特に其對照を明かならしめ且つ此新學理が普ねく全世界に擴まらん事を希望するの精神よりして國際語中の「希望(エスペル)」といふ原字を撰擇し茲にエスペル療法と命名した譯である

現今は學問が餘り專門的に流れ過て却て實際上には効果がない樣になつた傾があると予は考へるのである何程深き井戸の中に居る蛙でも他に大なる海や河のある事は知らないのである目覆を施されたる馬車馬は自身の通過せし道筋の外には他に道

略がないと思ふて居るであらう治療上に就ても今日の醫科では腦髓の作用を殆んど度外に置き重に其以下に於ける生理的の研究のみをして居り又腦作用の一部たる心理的の事は文科に於て研究して居る斯樣に人間の或る部分丈を各別に研究して居る樣では到底完全の治療法を發見する事は出來まいと考へる斯く專門に傾き過て居るから先年ベルツ博士の稱へし如き「日本人の戰爭に强いのは野菜類を多く食するからだ」といふ樣な間違た說も出て來るのである日本人の强いのは大根や菜葉の如きツマラナイ所に原因して居るのではない所謂日本魂に基て居るのである

今日は科學萬能主義にして唯物論者跋扈の時代であるから物質以外の事を了解する者少く爲に上記の如き間違た說を稱へても世人は其誤に氣付ないのである斯る幼稚なる智識を以て研究したとて疾病治療の確實なる方法を發見する事は出來まいと考へる其證據には治療上の手段方法が常に變遷究まりなく少しも大体の主義方針といふものがない即ち草根木皮より始まりて終に化學的藥劑となり而て近來は再び天然物を試みる樣な傾になつて來た例へば蓮の葉が癌腫によいとか馬鈴薯が糖尿病に効があるとか或は海水を精神病若くは胃病に試み或は蚯蚓をペストに試用し或は空氣や日光を肺病に應用して居る斯樣に其理由が明かならずして唯徒らに諸種の物質を使用して居るのである抑々疾病治療の研究は器械類が漸次に改良せらるゝが如き事柄と同視すべきものではない蓋し器械類に在ては生產上に多少若くは精粗あるに過ぎずと雖も治療上に於ては身体を毀損し若くは生命迄も失ふ事があつて取返しが付かぬからである故に充分學理を推究し根本的に解釋を試みねばならぬのである

尤も東洋に於ては約三千年の昔佛敎哲學に其大意を述べ病者を治療したる事あり（釋尊が阿闍王の難病を治療し我國に於ては弘法、日蓮等が諸人の疾病を治癒せしめたるが如し）又二千三百年以前の歐洲の大思想家プラトーンの著書にも次の如き事が記してある、ハルミデースといふ一青年がソークラテースに向て頭痛の治療法を尋ねた所がソークラテースの答に頭痛の藥は一種の木の葉であるが符呪の法と共に

用ゆれば頭痛が治るけれども唯藥種たる木の葉を用ゆる丈では効がないと言ひ尙ザモルキシスの言としてソークラテトスが此青年に話した中に眼を治療せんと欲せば單に眼のみを治療する事勿れ必ず頭部をも治療せねばならぬ身体を治療せんと欲せば單に身体のみを治療する事勿れ精神も共に治療せねばならぬものである然るにヘルスの醫師は斯る治療上の理を知らぬ者が多く實に彼等は部分と共に全体をも研究せねばならぬ事の理を知らないのである而て醫術上の最大なる誤謬は身体と精神とを別物として治療の術を施して居る事であると述て居る斯の如く智識の優れて居た人々は東洋に於ても西洋に於ても既に大昔に於て眞理を稱へて居つたのであるが兎角に社會の智識が低くして物質的の範圍内に限られたるゆへ斯る眞理を發達せしむる事能わずして今日に於ても尙其誤を改むる事が出來ないのである但し斯る人々は治療を專門とした譯ではないから其說きたる所は甚單簡ではあるが其内には明かに一條の眞理が含まれて居るのである

時の古今、洋の東西を問わず治療上には迷信が極めて多いものである例へば伊太利の外國移住民は腹痛の原因を猫の毛を呑みたるに歸し之を治すには卵の殼が最も善いと思ひ或は蝸牛を肺病の妙藥と心得殊に其体より分泌する粘液を珍重するといふ事である是等は二三世紀以前の學說を固信して更めないからである又エリサベス女皇時代の藥舖は藥用として蟹の爪、狐の肺臟、鹿の心臟、海馬の齒、飛魚、鰐魚及び木乃伊等を貯藏し殊に木乃伊は癲癇、眩暈、中風等に有効であると信じ目方一ポンドに付一弗餘の價にて販賣せられた事があり我日本に於ても人間の膽が肺病に効があると稱へ或は種々なる動物の乾燥、鹽漬、黑燒等を藥用として販賣した古昔東洋に於ては不老不死の藥といふて遙々遠國まで葡萄の實を探しに行た事もある但し予の學理と療法とに依れば夫藥といふ事も出來るのである右に記するが如き數世紀前の療法を今日の智識にて觀察する時は迷信なる事が直に了解せらるゝのであるが現今行ひつゝある所の療法になると假令へ迷信に屬する事でも氣が附かずに居る

のであつて今日の醫術治療も半は迷信的で其大本を誤て居る此事は既に諸種疾病の病理を論じたる時に述べたれば讀者は幾分之を了解せられたるべしと信ずるのである尚現今一般社會の狀況に就て見るに少しも効驗なき事明かなるにも拘らず二年三年若くは十年以上も服藥を繼續し居る者多く然のみならず死する際まで服藥を絶たざるを見て明瞭なるべし故に本書の初に於ても服藥は病に對する一の儀式の如くなつて居ると論じた譯である漢法に於ては六ヶ敷患者になると白米の粉末を紙に包み恰も散藥の如くして與へる事がある洋醫に於ても砂糖水若くは稀薄にしたる葡萄酒抔を投じ置く事が隨分ある然るに患者は善き藥であると思ひ之を服用して居るのである要するに醫書に記してある所の事柄を患者が詳しく知つたならば實に馬鹿らしくなる事が往々あるのである眞に確實なる治療法になれば患者が能く其事柄を了解する程益々効力が多くなる樣にならねばならぬのであると思ふ

予は少くも一二世紀以後の智識を以て治療上の原則を述べ完全治療法にまで論及し迷信の範圍より世人を救ひ出して容易く病苦を除き得らるべき學理を述べたのである

要するに現今の內科醫術には確乎たる主義方針がなく醫祖ヒポクラテス以來二千餘年の星霜を經過して研究し來りしにも拘らず概ね尚試驗中に屬するといふに過ぎないのである然るに今後も尚是迄の樣な研究の手段を繼續して居たならば幾百年の後に至り果して完全なる治療法を發見する事が出來るか實に覺束ない話である故に予は世界人類の爲め治療上に横たわる所の妖雲を排除し普く世人をして病魔を驅逐し得らるべき光明に觸しめんとして茲に此小册子を公にした次第であるされば全世界の何人よりも感謝して貰ふ事が出來るであらうと思ふのである

茲に世人の爲め注意すべき緊要の事がある世人は是まで物質的の治療即ち身体の方面より治療する所の方法のみを重に行つて來たから治療の際治者も被治者も精神

上の事は敢て間はなかつたのである然るに予の療法に於ては人間の全部即ち心と身体との兩方面特に根本たる腦髓を基礎として治療する事になつたのである故に此學理を應用して治療する者は眞心から患者の病氣を治して遣ろうといふ精神を以てせねばならず又患者の方面に於ても治者に信頼して全部を委任し眞心を以て治療を受けねばならぬのである何となれば治者は患者の生命迄も支配し患者は生命迄も治者に任すものなれば斯くあるべきが至當の事である(恰も船長と乘客との關係に同じ)是亦兩者の調和にして絶對の眞理に適つて居るのである此事は治療上に就て治者も被治者も能く心得て置かねばならぬ所の要件であるから特に注意して置くのである

第三章　肺結核新病理

肺病の事は第二章内科新病理の中に加ふべきものであるが社會に於て最も喧しく稱へて居る所の病氣であるから特に章を設けて詳細に之を説明する事にしたのである

現今世人は肺病と言へば恰も死刑の宣告を受たかの如く到底全快しないものと悲觀して居る夫も其筈で確乎たる治療の手段がなく實際に於て充分手を盡しても更に効能がないのであるから無理はない然るに近來肺病は治るものであると稱へる人が往々あるが能く取調べて見ると別に新しき考案があるでもなく從來有觸れたる學説と方法とに過ぎずして唯患者を引寄せんが爲の手段かと考へらるゝ所もあるのである既に前章に於て醫術は根本を誤て居るから諸種の病氣が治らないのであるといふ事を述て置たが肺病に就ても亦同樣であつて予の發見したる原則は本病に對しても

顯著なる効果を擧る事が出來るのである

先づ現今肺病には如何なる藥劑を用ひて居るかといふに重に結麗阿曹篤（クレオソート）、グアヤコール、炭酸結麗阿曹篤、炭酸グアヤコールである是等は皆防腐劑であるが胃腸を害する所の弊があるから食後直に服用させる事になつて居る元來肺病患者の身体は多く衰弱して居るものであれば成べく胃腸を丈夫にして能く滋養分を吸收せしむる事を謀らねばならぬのである然るに胃腸を害する樣な藥を用ゆるは寧ろ病を重くする譯になるのである而て是等の藥劑は肺病に對しても些の効を奏せざるのみならず却て頭痛、眩暈、呼吸困難、麻痺等の中毒的症候を起して來るものである

又亞砒酸（アヒサン）を用ゆる人もあるが此藥は毒藥であつて少量を連用すれば慢性中毒を來し多量を內服すれば急性中毒を起す藥物學にも亞砒酸の〇、〇一は危險であつて〇、一を死量としてある

慢性中毒の症狀は結膜炎、咽頭乾燥、頸部絞搾の感覺、嘔吐、下痢、頭痛、不眠等である而て尙服藥を續けて居れば貧血羸瘦して斃れるとしてある

急性中毒には二種あつて一は腸胃症一は神經症である腸胃症のものは咽頭乾燥、頸部絞搾の感を覺へ、痛痛、嘔吐、虎列刺樣の大下痢を發し、顏色蒼變、脈搏頻數となり。譫語痙攣を發して斃る時としては虎列刺の如く腓腸痙攣を起す事がある神經症のものは恰も麻醉藥中毒の如く頭痛、眩暈、痙攣、虛脫を發し昏睡に陷て斃るとしてある

右の藥劑は實際に於て効なきのみならず却て諸種の中毒的症候を伴ふものであれば予は寧ろ有害なりと論ずるのである

今本病に對し諸病院にて用ゆる所の二三の處方を擧て見れば

東京醫科大學では

結麗阿曹篤（クレオソート）丸　〇、〇二五乃至〇、〇五

右每食後二粒乃至三十粒內服

但し少量より始め凡そ二日目毎に毎回一粒を増す

東京杏雲堂病院では

結麗阿曹篤　〇、三乃至〇、五

右黄臘、甘草末、甘草越幾斯各適量を以て丸となし一日三回食後分服

但し現今は炭酸結麗阿曹篤を用ひて居る様である

大阪緒方病院では

グアヤコール　〇、三乃至〇、六

漸次増量して一、五に至る

鹽酸キニーネ　〇、三乃至〇、五

單寧酸　〇、五乃至一、〇

右健質亞那越幾斯を以て丸となし一日三回分服

名古屋川原病院では

結麗阿曹篤　樟腦　各〇、〇五

右謬嚢に入れ一日三回毎食後分服

或は

結麗阿曹篤　〇、一五

亞砒酸　〇、〇〇六

右丸となし一日三回食後分服

京都府立病院では

結砒丸　即ち結麗阿曹篤及び亞砒酸の合劑で川原病院第二の處方と略々同一である

北里博士の傳染病研究所(東京)及び石神亨氏の傳染病研究所(大阪)では

ツベルクリンの注射をして居る

是等の薬劑は皆微菌を撲滅しようとする所の目的であるが予は此目的が已に間違つて居ると思ふのである其理由は後に説明する事として此所では唯具体的に是等の薬劑が些の効を奏しない事を述べようと思ふのである

既にライデン博士は「肺病の薬物的療法は破産をして居る」と絶叫し其他殆んど總ての醫士も薬の効がないといふ事は其實認めて居るのであるが患者に在ては何か飲むものがないと安心が出來ないから唯氣休の爲に薬を與へて置くのである然し患者の方では醫術上の事は知らないから何所ぞに良い薬はないかと此所の病院に半月彼所の病院に一月と場所を變へて治療を受け又賣薬抔も用ひて見ると言ふ樣に色々と迷つて所々歩き廻つて居る内に病氣は段々重くなつて終に不歸の客となり終るのである既に二三の處方を示した通り何れに往くも大同小異で初から治る目的のない事は分り切て居るのである予は世界の肺病患者が斯る狀態の下に在りて概ね皆其生命を失ひ居る事の事實を目擊し誠に氣の毒の至りに堪へぬのである必竟するに未だ確實なる療法が世界に於て發見せられないからであると考へる

注意　結麗阿曹篤といひグアヤコールといふて名稱こそ異つて居るが其實は略々同性質のものである即ち結麗阿曹篤は山毛欅樹の乾餾產物たる篆兒を精製したものので種々のフエノール類殊にグアヤコール及びクレオゾールの混合物である故に結麗阿曹篤中の主成分はグアヤコールであつて通常七五%を含有して居る

炭酸結麗阿曹篤は結麗阿曹篤と那篤倫滴液との混和溶液にフオスゲン瓦斯（酸化格魯兒炭素）を導いて作つたものである炭酸グアヤコールも同一の方法で作つたものである

近來肺病新薬と稱する數種の薬品がある

其一「ブルモフオルム」はフオルムアルデヒットとグアヤコールとの混合物にしてメチーレン、グアヤコールである

其二「プノイミン」はメチーレン結麗阿曹篤にして既に結麗阿曹篤其物が七五%のグアヤコールと他種の類似品との混合物であるからプノイミンの中にはメチーレン、グアヤコールの外に數種のメチレン化合物を含有して居る

其三「ベツロール」はグアヤコールを基礎として誘導せる化學的製品硫化グアヤコールの加里鹽にして五二%のグアヤコールを含有して居る

右の如く新藥抔と稱べて居るものも結麗阿曹篤やグアヤコールを多少變形させたのみで唯臭氣や刺戟等の如き副作用を取除いた位の事に過ぎない故に其主成分は矢張同一である

ヒルシュ氏の說に依れば死者全數の七分の一は肺病に由て斃れ加之單に慢性症の爲に死だ者に就て之を算するも其總數の三分の二は肺病に原因して居るといひ獨逸國丈でも年々肺病の爲に命を殞する者が十五萬人を下らず我日本に於ては八萬人乃至十萬人位はあるといふ斯の如く世界に於て年々多數の死亡者を出し特に社會に於て最も有用なる壯年者を犯す事多きものなれば予は本病の爲め別に章を設けて根本的の解釋をなしたる次第である

醫書に於ては如何なる事になつて居るかといふ事を示す爲に愛氏内科全書の内より要點を拔萃して見れば

肺病の豫後は從來の經驗に徵するに頗る重大なるものにして多くは不良である但し時に治癒する者なきに非ざるも多くは病の初期にして患者が富有なる時にのみ望むべきものである蓋し豫後が患者の貧富に關係する事本病の如く大なるは他の疾病に於て殆んど見ざる所である是れ適當なる時期に於て故鄉を辭し憂慮せず又身体を勞する事なくして他國に滯在し得る者は屢々多年其生を有ち僥倖なる時は全治を見る事あればなり」としてある

右の如く假令へ富有の身で充分の療養をしても全治は僥倖なりとしてある即ち未だ適切なる治療法のない慥な證據である次に治療法に就ては如何と書てあるかとい

ふに

發現せる肺癆には今日に至るまで特効藥なし

從來本病に稱用せる藥物はワイグルト氏の熱氣吸入法、クルール氏の濕氣吸入法、弗爾阿兒水素酸吸入法、沃度加儡謨、百露拔爾撒謨。チンムト法、沃度吸入法、沃度加儡謨、百露拔爾撒謨、種痘（ブラシュー酸、燐酸鹽、窒素吸入法、羊、山羊、驢馬或は犬の血液移植法、ベルグマン氏の炭酸及び硫化水素瓦斯灌腸法、オイカリプトール皮下注入法（ブルッセル氏）砒石滅化金抱合物等其種類一ならずと雖も効力確實なるものに至ては未だ之あることなしコッホ氏のツベルクリンの注入は世の大に嘱望したるものなれども惜哉其効能は豫期に添わず今日に至りては殆ど廢棄せられて之を省みる者なし云々

又服藥に就ては

結麗阿曹篤〇、〇五を膠囊に包み一日三回、一乃至三個を與ふ及びグアヤコール（結麗阿曹篤と同量）を用ゆるは人の屢々使用する所の藥物にして近世に至りては炭酸結麗阿曹篤、炭酸グアヤコールの殊に賞用せらる此兩藥物は苦辣の味なく患者能く服用に堪ゆると雖も予（愛氏）は其肺癆に有効なるを知らず但し極稀には痰量少しく減少し食氣振ふと雖も或者に於ては然らず

故に肺癆を治療するには症候的療法を以て甘せざるべからず而て症候的療法中主要なるは善良なる空氣と滋養分に富みたる食物となり

醫書に述て居る所は右の樣な次第であつて詰る所善良なる空氣の場所に居て滋養分に富みたる食物を執り自然に治つて來るのを氣永く待て居るといふに過ぎない喧しい肺病に對して空氣療法と食餌療法より外には治療の手段がないとは從來の醫術研究も甚だ淺薄なものである左れば是非とも之を改良して有効確實の療法を探究し廣く本病患者を救濟する事を謀らねばならぬのである空氣や食物の如きは治療法と名を附る丈の價値はなく寧ろ養生法といふのが適當であると予は考へるのである

此空氣療法と食餌療法の事は一八五三年即ち今より五十年程前にブレーメルといふドクトルが之を言ひ出し續てデットワイレルといふ人も此說を稱へたのでブレーメル、デットワイレル法則と名附け現今之より外には治療の手段がないのである勿論善良なる空氣や滋養分に富みたる食物は善いものに相違ない獨り肺病ばかりではなく總ての病氣に善いものである否一般に無病の人にも善いのである然れども之を以て肺病唯一の療法と心得るは實に淺薄な考である

獨逸國には澤山の結核療養所があつて肺病患者を收容し之を治療する事になつて居るといふ事で誠に賞讃すべき事柄である然れども其治療の方法を聞くに矢張り空氣療法と食餌療法で他に特別の方法がある譯ではなく且つ此二法を極端に行つて居る樣である即ち横臥室と謂て南方に面し三方は全く明け放しにして唯北の方丈を板にて圍い北風を防ぐ樣にし屋根は廂の樣に出來て居るばかりで恰も屋外と同樣な所へ寢臺を置き如何に寒き日でも雪の降る時でも或は夜中でも患者を此所に横臥させて置く樣な事をしたり又過剩滋養といふて一日に七度も食物を與へる即ち朝食前に牛乳を飲ましめ、やがて朝食を與へ、十時頃に又牛乳を飲ませ或は果物菓子杯を與へ、一時頃に晝飯夫から又牛乳と菓子、七時頃に夕食、寢る前には又々牛乳を飲ませるといふ風にし、食慾の乏しき患者には胃の中へ管を挿し込で食物を注ぎ込むといふ樣な事をして居るそうである

孔子は「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」と言ひ釋尊は眞如を稱へて居る此中庸といふ事は絶對の眞理で何事にも應用せらるべきものである德川家康は「及ばざるは過ぎたるより優れり」と言た是等は治療上に就ても服膺すべき金言で例へば運動は吾人に欠くべからざるものであるが度に過ぐれば却て身体を疲勞せしめて害となる今新鮮なる空氣は必要のものなれども適當の換氣法を施したる家屋であれば夫で善い殊更に衰弱したる患者を寒氣に曝してまでも外氣を呼吸せしむるの必要はない尙又病人に非ずとも一般に虛弱なる者は冬季は寒氣の爲に身体の工合が惡く夏季の方

が寧ろ健康に生活するものであることは血液が不足で寒氣に耐ゆるの力が乏いからである蛇蛙の如き動物が冬季土中に蟄居するは寒氣に耐へる事が出來ないからである特に肺病患者は身体の衰弱して居る者なれば寒氣に觸れしめざる樣にせねばならぬ世人に注意して置くが新鮮の空氣は生活上必要の物なれども之を以て直に病氣を治す事の出來るものでない恰も清淨なる水は一日も欠くべからざる必要物であるが水が直に病を治すものでないのと同じ事である能々物の道理を考へて誤に陷らぬ樣にせねばならぬ

又滋養物も度に過ぐれば却て害となるものである健康な人でも過度に飲食すれば病氣を起し易いものである日本の諺には「腹八合に醫者入らず」といふ事がある即ち飲食を扣へ目にして居れば健康を保つ事が出來るとの意味で能く中庸の眞理に適つて居る所の言葉である熱病患者の恢復期には非常に食慾が盛になるが此時十分に飲食すれば十中の八九は再び病が重くなつて終に斃れるものである肺病患者は身体も衰弱し胃腸の働きも弱きものであれば假令へ多量に飲食させても能く消化するものでもなく滋養分も充分吸收せられずして体外へ排泄する故に多くの滋養物を唯腹の中へ入れる丈では役に立たないのである前章に於て說明したる如く胃腸の作用は腦髓に於て司どつて居るものであるから腦髓より治療すれば食慾を進める事が出來るのである一般に言へば患者の好む所の滋養物を口に適する如く調理し且時々品物を變更し常に患者が喜んで食する樣にし食慾に應じて適當なる分量を與へるのが善いのである何卒獨逸の療養所に於ても予の學理と療法とを採用して容易く多くの人々を救濟せられん事を希望するのである

是より病理の事を述べるのであるが結核菌は一八八二年獨逸のコッホ氏が顯微鏡試驗に由り之を發見してから肺病は傳染病であるといふ事になり肺病患者の喀痰中には澤山の微菌があつて痰が乾燥する時には此微菌が空中に混じ人が之を呼吸するゆへ微菌が肺の中へ這入て肺病を引起し或は患者の食器髮具等を其儘使用し又は牛

乳中にも微菌があつて之を飲むから肺病になるといふ事になつて居るのである

斯の如く空中の微菌から肺病になるとすれば人は肺病を豫防する爲に空氣を呼吸せずに居らねばならぬ事になる空氣の呼吸を廢すれば生活して居る事が出來ないのである尙消毒した物でなければ傳染の憂があるとすれば果物、生魚、生の野菜、氷水等其他生の物は一切飲食する事が出來ない譯になる否假令へ一旦消毒しても空氣中に微菌があるとすれば矢張り是等の飲食物に附着する譯になる誥り消毒するもせざるも同じ事になつて來る故に此物は消毒したから大丈夫であると思ふのも一の氣休めに過ぎないかも知れぬ夫に就て面白い實例がある

青森縣上北郡大深内村の母良田岩太(二十二)といふ人が當時三河國北設樂郡武節村に寄留し馬匹養成の事業に從事して居り明治三十九年十一月十三日に予の所へ來ての話に同氏は十一二才の頃より非常に水を飲たき念が起つて十ヶ年餘の今日に於ても一時間毎に水を飲まねば辛棒が出來ず夜間でも必ず目を醒して水を飲み充分心に滿足するまで飲めば一回に一升の水を盡す若し之を耐へて居れば氣分が惡くなり二時間以上耐て居れば熱發し終には氣がフレそうになつて來る演說抔を聞きに行きて暫らく水を飲まずに居れば實に堪へられぬ樣になつて來る依て演說場を出ると直に近邊の井戸へ馳付けて多量に水を飲む翌日其井戸の水を見ると非常な濁水で實に不潔極まる樣な事が屢々あつたが十數年以來未だ嘗て水當りがしたり或は微菌に犯された事は一回もないといふた

予は二十年前に肺病に罹つた事があつて殆ど死ぬばかりであつたのが僅に一命を拾ふた程であるから身体は人並よりも餘程弱ひ方であるが十數年來夏の内だけは何れの土地に住居しても常に水を飲で居り殊に湯茶の代りに飯へ掛けて食して居るが一回も水に當つた事はない予が夏向水を用ゆるのは別に理由があるのではなく熱い湯茶を飲めば汗が出るし又一旦沸した湯茶を冷したものは甚だ味が惡いからである誥り自身の好んで飲食するものは大概中毒する樣な事はない之に反し嫌いな物は新

鮮にして且つ滋養分多き物でも身体を害するものである博士井上圓了氏の著書には次の例が掲てある

余が知友に生來鮪魚を嫌忌せるものあり一日親戚の家を訪ひしに其家にては當人の鮪魚嫌を知ると雖も思ふに生れなから一回も其味を試みたることなきによる若し一たび之を味はゝ必ず喜びて食するに相違なかるべしとて殊更に鮪魚の茶碗蒸を作りて鰻なりと稱し今夕は東京より到來の鰻あれば茶碗蒸にして供したりといへり當人は生れて後全く鮪の味を知らざりし故現に食せる鰻は通例のものとは少々其味を異にする樣に感せしも是れは他國の品なれば左もあるべしと思ひ喜びて之を食し了り茶席に移りし時主人は客に向ひて君は生來鮪魚を食わずといふも全く詐りなり其故は先刻の茶碗蒸は鰻にあらずして鮪なればなりと告げしに當人は忽ち氣色を變じ腹痛を起し嘔吐を催ふし煩悶甚しく大病人となれり依て急に醫士を迎へて藥を給する等一家擧て終夜の看護をなせり云々

今日の樣に黴菌々々といふて恐れて居ては終に此世に生活して居る事が出來ない樣になる實に愚の至りと言わざるを得ないのである實際現今社會の智識は物質的に傾き過て精神上の智識は殆ど皆無であるから意思が非常に薄弱になつて病氣にも罹り易いのであるコッホ氏は結核菌を發見したといふて有名であるが肺病を治す上に就ては少しも貢献して居ない否黴菌說の爲め世人を恐怖せしむる樣になつたから却て肺病患者が增加したと思ふ予は自身の實驗上よりも斯く論ずるの決して不當に非ざる事を確信して居るのである

前藥にも一寸記したる如く予は肺病に罹り醫士も全快覺束ないといふた位の重患であつたが重に自身の力で恢復せしめた後餘儀なき事情があつて親戚の人を予の家に同居せしめた事があり勿論少し病の氣はあつたが左程の病氣がある者とも思わざりしに半年程予の家に在て死亡し始めて非常なる肺結核であつた事が分つた夫までは同一の茶碗で茶を飲み同し煙管で煙草を吸た事もあり日常接近して居たし殊に予

は以前肺病に罹り身体も弱つて居るから傳染したらうと思ふたら俄に氣分が惡くなり咳嗽も加わり全く肺病患者の如き容体となつた直に京都府立病院へ赴き診察を受けしに初期肺病であると言われ益々容躰は惡くなつて來た依て更に大阪に赴き石神亨の診察を受けしに喀痰中には結核菌は見へぬ入院しなければ確たる事は分らぬが先づ心配はあるまいといふた夫で予は非常に安心して歸つたが翌日より平常の通りになつた此時より予は傳染するものでないと確信したから現今では如何なる肺病患者に接しても何とも思わず又肺病患者の用ひし食器を其儘使用する位の事は何時でも之を行て見せる樣になつた

恐怖心から肺病患者が多くなるといふ事は信用ある萬朝報の記者曾我部君の肺病全治實驗談中にも馬島といふ醫士が次の樣な事を話したと書てある

北里博士が肺尖加答兒は肺病の始まりで詰り肺結核の初期であるといふ事を主張せられて以來肺尖加答兒に罹つて慮る者が非常に少なくなつたのは不思議である博士の意見がまだ發表せられぬ前は肺尖加答兒に罹つてもズン々々全治したものであつた

右の如き譯で世人を恐怖せしむるが爲に却て肺病患者の增加する事は事實である從來の醫術は唯生理一方の研究にして心理との關係如何を知らざるか故に細菌を發見したからといふて實際には病氣を癒す事が出來ないのである予は細菌の發見は寧ろ患者を增加し及び之を死に陷らしむるに與つて力があると思ふのである

明治三十六年一月予の所へ來た岐阜縣惠那郡福岡村丹羽某は或醫士の黴菌に關する演說を聞てから非常に恐怖の念を起し常に黴菌の事が心に懸りて忘るゝ時なく衣服も三日目毎に熱湯に浸して消毒せねば着て居る事が出來ず夫故寒中でも綿入の着物を着せずして袷を用ひ夜寐る時も乳より上部を蒲團の外に出だし又市中で買物をして釣り錢を取る時には豫て用意したる鼻紙の上へ受取り其他萬事萬端黴菌を防ぐ事のみ心掛け家業抔は少しも手に附かず自身にも實に馬鹿らしく思へども改める事

が出來ないと言ふたこは微菌恐怖病とも名付くべきもので斯る人は僅かなる動機があれば直に肺病となるのである

井上博士の著書には次の例が擧てある

加州能美郡にて本人より直接に聞きたる話に同郡某氏前年の二三月頃より少々風邪の氣味にて時々咳と痰との出づることありしも格別意に留ざりしが或朝起て庭前に向ひ痰を吐き出したるに其色赤くなりて見へければ自から肺病なりと速斷せしが急に心臟の動悸大に高まり体温も平熱以上に昇りたる如く覺へ食も進まず氣分も快からず早速寢室に入りて平臥するに病勢益々進み咳も痰も漸く加わり自から思ふに餘命一年を保ち難しと死後の事など思ひ起し苦悶胸に餘る程なれども其實を家族に打明なば定めし非常に驚くならんと思ひ終日秘して人に告げず唯獨り憂慮してあゝしが兎に角明朝は遠方より名醫を聘して診察を乞わんとて先づ自分の吐きたる血痰を檢するの必要ありと思ひ夕刻庭前に出でゝ之を探り見しに朝時に血痰と認めしは全く誤にて己れの吐きたる痰が地上に落下せる椿花の斷片に附着し一轉して痰の上に花片を浮ぶるに至りたるを樣側の上より望みて血痰なりと誤認したるに相違なき事を發見し肺病に非ざる事の疑念全く晴たれば心臟も体温も共に常態に復し氣分も俄に爽快となり食も進みて平時の健康と少しも異らざるに至れりといへり若し其椿花の斷片なる事を發覺せざるに於ては多分肺病患者となり終に不歸の客となりしやも計り難し世間には此の如く精神作用より病氣を起す者必ず多からんと信ず

肺病の傳染といふ事に就て現今の學說では如何に說明して居るかといふに結核菌は培養しても容易に殖へない假令へ殖へても非常に遲く二週間三週間永きは四週間を要する夫で微菌が人体内に這入ても永らく潛んで居て急には起らない故に何時何所で傳染したか分らない小兒の時に病毒が這入て夫が青年時代になつて現れて來るのもあれば或は半年一年位たつて起るのもある是は主として体質の如何に由るので

語り身体が強ければ假令へ病毒が這入ても肺病の症候を現さずに治るのもあり或は治らずとも其儘依然として居つてインフルエンザとか腸窒扶斯とかいふ樣な病氣の爲に抵抗力が弱くなると潜で居た病毒が半年一年或は二三年にして起つて來るといふのが今日一般に稱へて居る所の學說である

假令へ病毒が這入ても一生肺病とならぬ者もあり或は小兒の時に傳染したのが青年時代になつて現はれて來るといふ樣な事は如何にも漠然たる想像說である又身体の抵抗力が弱くなつた時に病毒が勢を得て肺病になるものとすれば青年時代は寧ろ身体が強く年を取るに從つて弱るものなれば肺病は寧ろ老年者に多く青年時代には却て少かるべき筈であるが實際は之と反對である又肺病以外の病氣で身体が弱つた時にも概ね肺病になるべき譯になつて來る然し事實は斯る事を證明しないのである

數年前獨逸の各大學で肺結核以外の病死者中結核病に罹つた人が何程あるかといふ事を解剖して調べて見たのに最も割合の少いのが百人の屍体を解剖して二十三人は以前肺結核であつた事を發見し多いのは百人中六十人もあつたといふ事でネグリー氏の如きは何人も肺結核に罹つて居るので唯身体が弱くなつた時に結核病が現れて來るのであるといふて居る佛國のブロマトル氏も死体解剖の結果無病な人で結核の痕迹を殘して居る者が五十プロセントあると言ひコルネット氏は人間は誰でも生涯に三年間は結核に罹るべき運命があると言て居る又ベーリング氏は健康体の組織並に血液を顯微鏡にて調べしに屢々結核菌の存在を認めたといふ事である黴菌說も斯の如くなつては肺病を治療するに最早結核菌を撲滅するの必要がない譯である

細菌學者ベーリング氏は「人間の肺結核に罹る原因は外ではない十中の八九は牛乳中の結核菌から傳染するので人より人に傳染する事極めて稀である元來乳呑兒の消化器は軟弱であるから牛乳中の結核菌は血液の中に混じ數年の後に至て發育するのである」と言ふて居る

此說は所謂牛乳傳染說といふので今日世間の人が牛乳を飲む時に一旦之を沸騰す

るのは此說に基て居るのである元來西洋では小兒を養育するに概ね牛乳を用ひて居るから肺病は牛乳から起るのであろうと推測して斯る說を稱ふるに至つたのである我日本國では約四十年以前までは一人も牛乳杯を飲む人はなかつたのであるが肺病は昔から存在して居つたのである尤も一千年以上の大昔に於ては僅かに上流社會の一部に於て牛乳を用ひた事跡が見へるのであるが北里博士の研究に依れは日本固有の牛には全く結核菌がなく假令へ濃厚なる多量の結核菌を日本の牛に種々の方法を以て注射しても感染する事極めて稀なりといふ故に牛乳より肺病を起すことは言へないのである尙又小兒の時に飲た牛乳から傳染し夫が二十年も三十年も經過してから現われて來るといふ樣な事は之を承認し難いのである

又コッポ氏は「人の結核菌と牛の結核菌とは同一であるが如何なる方法を以てするも人の結核菌を牛に傳染せしむる事が出來ず又牛の結核菌を人に傳染せしむる事も亦難い故に牛乳中の結核は憂ふるに及ばない」と言て居るコッポ氏ベーリング氏といふては現今獨逸に於て有名な細菌學者であるが其言ふ所は全く正反對で一人は「牛乳中の結核から肺病を起すもので人より人に傳染すること極めて稀なり」といひ他の者は「牛の結核菌は人に傳染しないから牛乳中に結核菌があつても構わない」と言ふて居る斯の如く微菌說の本家本元に於てさへ其學說が甚だ不確實である必竟するに第一章に於て述べし如く唯表面を見た丈の考であつて是等の學者の研究も其範圍が狹く隨て實際に本病を治癒せしむる事が出來ないのであると考へる

又多くの學者は兎、モルモット、南京鼠抔に結核菌を注射して試驗をして居るが一向感染しない事もあり或は注入後其動物の血液中に結核菌の存在して居る事もあるが左りとて必ず肺病になる譯のものでない勿論微菌の生息して居る樣な不潔の液体を然も多量に注入するのだから其動物の身体に善い事はないのである

右に述べたるが如く本病に關する微菌說は甚だ不確實であり又往々無理にコジ附けて此の說を成立せしめ樣とするが如き形跡が見へるのである抑々疾病治療の要は

「治癒」に在るものなれば如何に學説丈を組立ても實際に病氣が治らなければ少しも役に立たないのである

近來は醫士にして肺病は治るものであると稱へる者が往々あつてゲーデは十九歳の時に喀血したが長壽を保つて世界の文豪となつたとか名高いブレーメル佛のデットワイレル外科醫ベアンの如き何れも青年時代には肺病であつたが全治したとか或は解剖上で以前肺結核であつた者の治癒して居る事を發見するといふ樣な例を擧て居るが其治療の手段方法は本章の初めに述べたる藥劑と空氣及び食餌療法に過ぎないので實際には一向治し得ないのである有名なる故福澤翁の婿に當る福澤桃介君の肺病實驗談中には次の事が述てある嘗て桃介君が肺病に罹つた時北里博士の病院へ入院した北里博士は福澤翁の恩顧を受けた事もあるから其婿たる桃介君の治療には特別に注意したが更に効能がないので桃介君は無理に退院し夫より藥も廢し唯自身の修養丈で全快せしめたとの事が記してある

加藤病院長ドクトル加藤時次郎君の肺病實驗談中には一切藥品を斥け義太夫を語つて居たらベルツ博士が來て聲を出すのは惡いといふて忠告したが同君は醫者や藥は當にならぬものと固く信じて居ると答へて終に自身の肺病を全快せしめたといひ又東京市養育院の醫士小原隆造君の肺病實驗談中にはクレオソート、グアヤコール、クレゾオル、ベトオル、キニートル其他種々樣々の藥を効能書や廣告に迷ふて用ひて見たが一向効能がない中には却て害となるのもある又滋養物は魚肉、獸肉、鷄卵、牛乳等を缺さず用ひたが体量は少しも增さなかつたと述てある此二君は醫士であつて然も斯る事を公然新聞紙上に掲げたので最も信用が出來るのである

予の知れる貴婦人は肺病に罹り最初より熱海、鎌倉、鹽竈、犬吠崎、勢州等所々の善良なる土地へ絶へず轉地療養に赴き又多くの名高い醫士にも診察を受け其指圖に從て服藥は勿論滋養食物等に至るまで少しも缺點なく金錢を惜まず十分に手を盡し四ヶ年間怠りなく療養したが漸々病勢は重くなつて來るばかりで遂に全快しなか

つた現今は轉地(所謂空氣療法)が流行で東海道及び山陽道の海濱到る所の勝地には實に無數の肺病患者が常に轉地療養をして居るが全快する人は殆んどない位である是等の人々は醫士の指圖に從ひ十分に手を盡しても更に効がないのである斯く効能がないのは全く其療法を誤て居るからである

扨て從來稱ふる所の學說は歸する所甲の微菌が乙に傳わり乙の微菌が丙に傳わり斯く段々に傳わりて獨り人類間のみならず牛乳を飲用する等の事よりして微菌が人体内に入りて肺病を引起すのであるといふ事になつて居るのであるが然らは抑々最原的微菌即ち一番最初の微菌は如何して此世界に生じ來りしものなるやとの疑問を出したならば之が明解を與へる事は出來まいと考へる因て予は微菌其物の發生する所以から說明しようと思ふ

抑々物は物質とエネルギーとに由て出來るもので物質とは有形を指しエネルギーとは能力と譯し即ち無形である勿論物質とエネルギーとは各單獨に存在して居るものではなく既に一つの物となれば其中には物質とエネルギーとの二つか含まれて居るのである今通俗的に分り易く說明せんに玆に水素と酸素との二つの物質がある(詳しく言へは水素或は酸素の内にもエネルギーを含んで居るのであるが假に物質丈として說明して置く)此二つの物質が火力といふエネルギーと合する時には水を化成するのである既に水となれば水素や酸素とは少しも似た所はない斯の如く物質とエネルギーとが合して一新体を形造る時は全く異りたる一物が成立するのである

人が永らく入浴せずして且垢の附た着物を着て居る時には約一ヶ月餘にして虱といふ一の小動物を生ずる事は人の能く知て居る所である是は虱の卵が他より飛で來た譯ではなく人間の垢といふ物質と体温といふ力とが合して新しく動物が出來たのである其他空氣とか太陽の温度とかいふものも無論關係して居るのである

白米を永く米櫃に入て置く時には黑色の小さな虫が澤山に出來る是は糠等より生する所の温度(糠を俵に入れ置て其中へ手を突込て見れは明かに熱度の生して居る

事が分る）米櫃中に蟄積する空氣、米糠及び太陽の温度等の如き物質と力とが總合して斯る小虫を新に生ずるので他より來たのではない

小麥を俵に入れて蓄へ置時には小な白色の蝶を生ずる此事は農家の人は能く知て居る所の事實である蝶が他より來て俵の中へ卵を産付た譯ではなく俵の中に蟄積する空氣、小麥中の物質及び夫より生ずる温度等が彼是れ合して白蝶を新生するのである

生栗を蓄へ置けは殼の中に虫が出來て實を喰ひ盡すものである而て殼には虫の這入た様な孔は一つもない殼を破つて見ると中に虫が居るのである八百屋から生栗を買て之を食べ様と思ひ中の實を取出して見ると虫の居る事が往々あるが外部より之を見分る事は出來ないのである故に虫が外部より這入たのではなく内部に於て新生したのである

鰹節を蓄へ置く時は總身に毛の生た虫が出來て鰹節を食ふものである俗に之を鰹節虫といふ又乾酪といふて牛乳を乾燥した物の中には乾酪虫と稱する一種の虫を生ずる事がある是は乾酪を製造せざりし以前にはなかつたものに相違ない

洋服、毛布、唐縮緬、毛皮等を格納して置けば自然に虫が出來て之を食ふものである尤も時々取り出して風に當てる様にして居れは斯る憂はない故に他より這入て來たのではなく其物の中に新生したのである

盆栽に生魚を料理した時の水を注ぎ置けば數月の後其植木に恰も綿の付た様な白色の小なる斑點を生じ夫が漸々大きくなつて豆粒大となり終に淡黄色の虫となる予は二三の樹木に就て之を實驗した事がある

斯る例を擧ぐれば實に數限りのない程あつて此様に現世界に於ても小動物は前代の種子に非ずして物質とエネルギーとの相合に由り幾らも新生する事が明である斯く論ずる時は大なる動物は如何との疑問が自然に起つて來る譯であるが斯る動物は前世界に於て地球や太陽の熱度も強く且物質も之を生ずるに充分なりし時代に出來

たので此事は生物進化の説明となり地球の成立た事までも述て行かねばならず又予はダーキン氏の生物進化説にも多少の異議を稱へるのであつて議論が枝葉に渉るから之を省く事にする此所に於ては唯小動物は現世界に於て幾らも新生するといふ事が分て居れば病理を説明する上に差支へはないのである

右の如く小動物の新生する事は明である動物にもあらざる微細の微菌位が新生するのは何でもない事である微菌は早く言へば微である餅を春て數日を經過すれば微が出來る是は餅の中の物質と空氣及び温度等の物質と力とが合して微を生ずるのである尤も夏は温度が強いから餅が早く微る又小動物も夏向に多く生ずるものである

動物試驗に由り微菌の新生する所以を示さんに蠶兒を顯微鏡にて能く檢査し無菌健全なるもの數匹を少し濕り氣のある桶の中へ入れ充分に桑を與へて後紙を以て桶の上を覆ひ二時間日光の當る所へ出して置く時は桶中の蠶兒は盡く軟化病の一種なる空頭病となり之を顯微鏡にて檢すれば球狀菌を生じて居る僅か二時間前には無菌健全であつたものが僅少の時間中に盡く微菌を生じたのである是は蠶兒体中の物質及びエネルギーと濕り氣ある空氣、太陽の温度等に由て微菌を新生したのである此球狀菌の名はストレプトコックス、クロニコクトサスと稱へて居ると謂ふ事である但し之を試みるには四眠後位の大なる蠶兒を用ゆる方が明瞭に分るのである

右は微菌の新生する所以を大略述べたのであるが然らば斯る方面より論じて肺病は如何して起るかといふ事を説明するに當り先づ肺臓は如何なる役目をするものかといふに元來血液は心臓を發し身体を循環して各部に營養分を與へるものである言換へれば血液中に在る善良なる質を肥料として各部に與へて居るのである故に血液は各部に營養分を吸ひ取られて段々に其質が悪くなり終に暗黑色となつて戻て來る此戻つて來た暗黑色の血液が肺臓へ入來り茲に肺の呼吸する空氣に觸れて空氣中の酸素を取り再び鮮紅色の善良なる血液に復し心臓へ歸て行き更に身体を養ひに出て行く樣になつて居るので詰り肺は空氣を呼吸して血液を清淨ならしむる所の役目を

するものである

既に第一章に於て說明せし如く非常に心配するといふ樣な刺戟に相遇するとか或は寒冷なる空氣の刺戟に由り風を引くとか其他種々の事柄から根本たる腦髓の力が衰へる即原動力が弱くなり或は其作用に錯を來す時は肺や心臟の活動が惡くなり肺部に充血若くは鬱血を起して來る樣になる恰も發電所の電氣力が衰へる時は電燈の光が暗くなると同じ譯である唯さへ肺部に入り來る所の血液は暗黑色となつた不良の血液である斯る血液が鬱積し且血液を清淨ならしむる所の肺の作用も衰へて不良なる空氣が滯つて居る樣になる斯樣な譯で局部に炎症を起し終に結核菌を生する事になるのである通常肺尖加答兒とか肺浸潤とかいふて居る內は未だ微菌の出來ない時期で夫れが段々時日を經過するに從ひ眞の肺結核といふ事になつて來るのである

實際肺病は神經衰弱から始まつて來る事が甚だ多いのである以前は心配すると肺病になると世間で稱へて居たがこは實際上より生じたる眞理である然るに微菌說が盛になつて却て此眞理を埋沒する樣になつた神經衰弱とは腦髓の力が衰へたのをいふのである此神經衰弱を起す所の原因は種々あるが心配苦勞といふ樣な事は特に之を起し易いのである肺病患者に接近して傳染の事を氣遣つても神經衰弱を起す者が隨分ある甚しく肺病を恐るゝ者は微菌の傳染に非ずして肺病を自發するものである其他神經衰弱を起す所の原因は睡眠の不足、過度の勞働、不平、不滿、憤怒、悲哀、過飲、過房、手淫、一般に不快の感情等甚だ澤山ある

殊に壯年時代は物事に感動し易く且初めて社會の荒波中へ泳ぎ出した時で種々な刺戟に堪ゆるの力が乏しく自身の身の上を案ずるとか學業の進まざるを憂るとか過度の勉學若くは勞働に從事するとか失戀の爲め厭世的に陷るとか事業上に就て苦心するといふ樣な事が甚だ多く之が爲め非常に腦を苦める最早四十歲近くにもなれば社會の事柄に就ても十分經驗も出來且身の上も大概極りが附く樣になつて心が落附て來る樣になる是が壯年者に肺病患者の多き重なる理由である予は重き肺患に罹つ

た實驗があるが大なる心勞が原因であつた事を慥に認めて居る

又生活上の苦痛といふ事も非常に腦を苦めるもので往々貧苦の爲に自殺する者さへある位なれば一通の苦惱でない事が明である昼夜休なく勞働して然も滋養食物や快樂もなく常に苦惱が絶へないのであれば身体の弱くなるのも當然である俗に貧相と稱へて居るが心を苦めるから顔の肉も落ちて貧相になつて來るのである昔から四百四病の病より貧程つらきものはないと言ふて居る通り貧苦は非常に腦を痛めるものである是が貧民に肺病の多き原因である昔は醫を仁術といふて患者よりは先第一に米櫃の診察をした醫者もあつたといふ事を聞及である總て世の進むに從ひ益々生活が困難になつて來るから肺病患者は寧ろ增加する譯である

約二十年前予は軍隊に奉職して居た時先妻に死なれ宅には下女一人で予は日々出勤し且時々宿直もせねばならぬ事として己を得ず遠方の實家より母親に來て貰つた然るに僅か二ヶ月と立たぬ間に又母が死亡した(肺病に非ず)重ね々々の不幸に相遇し且落へとてもなく悲哀と心勞とで進退谷まり實に言ふに言われぬ心痛であつた夫が爲め予は終に肺病となり職を辭する事になつた予は全く心痛が發病の原因であつた事を慥に自覺して居る夫より予は病氣を療養するの參考にする爲め人々に肺病患者の事を尋ねた其内で家庭上の事まで分つたのは次の數例である

某家の娘は至て氣の小さい性質であつたが其家の暮し向が不如意で時々執達吏が來たり或は兩親が借金の言譯をするのを甚しく心痛し傍で見て居るに堪へずして月末には親類の所へ避て居る事もあり常に貧苦を歎て居たが終に肺病となり二十歳で死亡した又二十三歳の某婚人は十五歳の時から繼母と同棲する事になつて精神上の壓迫を受けつゝありしが終に肺病となり金錢上には些の不自由もないから充分療養に手を盡したが助からなかつた

或男子は養子に行きしに其家に拾ひ子があつて養母は頻りに其子を愛し且一通りならぬ人物で常に養子を押へ付て居たが養子は終に肺病となつた又或る藝者は

相場師に受け出されて妾となつたが常に本妻より妬まれ何かと苦められるので身体は樂であるが氣苦勞が絶へず藝者で居る方が遙かに善いと逢ふ人毎に話して居た此者も終に肺病となつて死亡したといふ

唯外部より觀察し容躰を聞く丈では精神上の事は分らず又人には餘り話さない事であるが家庭上の事を能く取調べたならば右の如き事實に原因する肺病が隨分世間に多いだろうと考へる予は自身の發病原因といひ右等の事實を思ひ合せて精神を强固するが第一であると考へ勉めて樂天的になり病に打勝つ事を心掛け熱心療養して終に全快する事が出來た實に肺病の如きは自身に實驗した人でなければ充分其味は分らないものである

痔を治療して血の出ない樣にする時は却て肺病になる事が往々ある痔を治した爲に何故俄に微菌が勢を得る樣になつて來るのであるが實に譯の分らぬ話である予の病理に於ては之を次の如く說明する即ち是まで肛門より排泄し居たる血液を止たから斯る血液が內臟に充血し前に說明せし如き譯で終に結核菌を生ずる事になるのである

右は予が初めて稱道する微菌新生說の大要を述べたのである予は自身の研究上より特に肺病に於ては傳染よりも新生する場合が甚だ多いと信ずるのである斯る見地よりして予は肺病患者を離隔するとか咯痰及び飲食物等を消毒する衛生法に依て肺病を全滅し得べしと考ふるは大なる誤謬なりと思ふのである何となれば新生說の方面より論ずれば微菌は寧ろ結果といふ事になつて來るからである前に例せし如く虱の卵子はなくても虱が新生して來るのである假令現今世界に存在する結核菌を全滅し得たりとするも結核菌は新生するから肺病患者は幾らも出來るのである然れども社會の事は總て循環的のものなれば直線的に一方からのみ論ずべきものではない虱は新生する事もあれば其卵子より蕃殖する事もある

結核の傳染といふ事に就ては既に多數の學者が各種の動物に移植して研究したが

感染する事も否らざる事もある一例を擧ぐれは某醫士が一つ腹から產れた二匹の小兎に同一の方法を以て多量の結核菌を注入し一匹は廣き柵内に入れて自由に生活せしめ他の者は小犬と同一の柵内に棲居せしめたるに自由に生活して居る方は何事もなかりしが小犬と同棲して常に犬より苦められた方は病氣となりて終に死亡し之を解剖したら多數の結核竈を生じて居たといふ事である斯く多量に注入してさへ病氣にならぬものがある或は結核菌を注入せずとも犬と同棲して常に苦められて居つたならは肺病となる兎が出來るかも知れないのである

近來獨逸抔では非微菌性の肺病があると稱ふる醫士があるとの事である既に前葉に述べたる如く健康体の血液中にも屢々結核菌があるといひネグリー氏は何人も肺結核に罹つて居るので唯身体が弱くなつた時に結核病が現れて來るのだといひ其他是迄述べたる事柄を總合すれば本病を治療するに微菌を撲滅するの手段を取る必要はないのである何となれば身体が弱くなつた時に結核病が起るとすれば假令へ一時殺菌し得たりとするも身体が弱ければ再び微菌に犯されるからである又微菌が体内に存在するも病的症候を起さずして健全であれば夫でよいからである故に予は本病を治療するに殺菌を目的として諸種の藥劑を投ずるは誤りであると論ずるのであつて斯る手段が實際に於ても亦寸効がない事は既に説明した通である

然るに兎角殺菌を目的として研究し結核菌に某藥品を注いだら何分時に生活力を失つたから其藥は肺病に効があるだろうといふ風に考へ或者は酒類の中に結核菌を投じたら死滅したから酒は肺病の藥であろうとの説を述べた斯る論法を以てすれば鹽水も殺菌力があるから食鹽も肺病の藥になるだろうといふ事になつて來る現に虎列刺病には食鹽水の直腸注入抔をして居るが更に効能はないのである又佛國バラダー氏は太陽の光線が殺菌力を有して居るからといふて患者を日光に當てる所の療法即ち光線浴を試みた勿論太陽の光線は總ての生物に必要な物ではあるが之を以て肺